

淑徳アカデミア

# 創作集



*No.3*

# 目次

俳句の実作と鑑賞講座 作品集 講師 俳人 井上 弘美

月華集 井上 弘美 抽

6

淑徳大学公開講座

「佐藤孔亮の川柳入門講座」

講師 佐藤 孔亮

10

根本 千恵子

清水 春子

吉田 小尋

真弓 哲

早川 若丸

短歌の実作と秀歌鑑賞講座

講師 歌人 牛山 ゆう子 11

きさらぎの風

牛山ゆう子

葉蘭

熊谷 史子

鬼灯

真庭 郁子

秋から冬へそして節分

石井弥栄子

「詩を書くこう」講座

講師 詩人 川口 晴美 13

今年竹 詩田ユリ子

武藤 三山

2007.11.17 池袋 13:06

オフィーリア

詩人

川口

晴美

13

〜シェイクスピア『ハムレット』の舞台より〜

青山 夕璃

愛情は濁点だ

岡野 博

一字

岡野 博

17

15

14

エッセイを書く 講師 中本 道代 19

空き地の三月	中本 道代(詩人)	19	『宝物拝観』	平井 浩幸
異色の海外旅行	石川 多了	20	『いますよ』	渡辺 幸子
中東思いつくまま	石川 多了	20	『誠意』	除村美代子
寒い朝	岡田 照子	21	『電車』	永宮 貴子
老いる	岡田 照子	22	『樹上の怪』	田中 正二
中国の近未来	岡田 照子	22	『化かし合い』	武藤 多恵
懐かしい猟犬の物語	氣多 保雄	23	『フルドレカンレンドレーチェという名前の店』	田波 晴佐
ハーモニー	氣多 保雄	23	『ヒーローズ』	平井 浩幸
F先生の思い出	長瀬瑠以子	25	『プレゼント』	渡辺 幸子
情報誌と私の十年	長瀬瑠以子	25	『うっかり』	川又 千秋
アクエリアス—水瓶座の時代	平野 佳美	27	『撞木鯨の言葉』	永宮 貴子
ガラスに魅せられて	平野 佳美	27	『家庭内暴力』	渡辺 幸子
緑	吉沢 智子	29	『見誤り』	除村美代子
人生の最後に何を食べたいか	吉沢 智子	29	『コンタクト』	平井 浩幸
	吉田 緑	30	『悲しい事しかかけない鉛筆』	田中 正二
	吉田 緑	31	『春は自転車に乗って』	武藤 多恵
			『嵐の朝』	除村美代子
			『枕』	武藤 多恵
			『近頃の若いモン』	川又 千秋

小説創作講座

作家・淑徳大学国際コミュニケーション学部講師 川又 千秋 32

【三百字小説作品選】

『人類の神秘』

武藤 多恵

絵本をつくろう！ 講師 詩人 木坂 涼 38

私と絵本

詩人

木坂 涼

消極性という積極性？

木坂 涼

受講生作品集

特別寄稿

立春から暮春の部

春とタンポポ

淑徳大学公開講座「ハーブのある暮らし」講師

チベット自治区がゆれている

大正大学講師・淑徳大学公開講座「密教」講師

緩やかな時間

歌人・淑徳大学公開講座「短歌」講師

春の雪

淑徳大学エクステンションセンター

春のティーカップ

淑徳大学公開講座「ティー講座」講師

21世紀を担うリーダー養成講座

アドベンチャー・コーチング(株)代表取締役社長

さくら、さくら

画家・淑徳大学公開講座「鉛筆画・パステル画」講師

手書き文字寸感

書家・淑徳大学公開講座「かな書道」講師

萌黄色の霞

演出家・淑徳大学公開講座「朗読講座」講師

喜多見の古社の追儺神事

筑波大学名誉教授・淑徳大学大学院客員教授

萌え出づるもの

書道家・淑徳大学公開講座「書論」講師

地下鉄十三号線物語

淑徳大学国際コミュニケーション学部教授

六義園散策

淑徳大学国際コミュニケーション学部教授・淑徳大学公開講座「源氏

物語」講師

宮川 葉子 48

立夏から盛夏の部

五月は菖蒲の季節

いけばな五十鈴古流主宰・淑徳大学公開講座「いけばな」講師

蜘蛛の糸

香道古心流・淑徳大学公開講座「香道」講師

五月の歳時記

國學院大學講師・淑徳大学公開講座「万葉集」講師

梅雨の始まる穴

俳諧史研究家・淑徳大学公開講座「徒然草」講師

其角の五月雨

俳諧史研究家・淑徳大学公開講座「おくのほそ道」講師

歌謡曲の初夏

文芸評論家・東京工業大学教授

初夏の池袋の思い出

淑徳大学エクステンションセンター

七月の歳時記―七夕の恋―

國學院大學講師・淑徳大学公開講座「万葉集」講師

表装師の夏の宵の夢

表装文化伝承支援協会理事・淑徳大学公開講座「表装」講師

表装師の夏の宵の夢

表装文化伝承支援協会理事・淑徳大学公開講座「表装」講師

表装師の夏の宵の夢

表装師の夏の宵の夢

長谷部雄三 52

阿部 啓子 42

伊藤 堯貫 42

牛山ゆう子 43

岡本 勝人 43

小澤 千恵 44

織田 善行 44

神尾 和由 45

鈴木 麗薫 45

永島 直樹 46

野田 茂徳 46

森 高雲 47

星野 英樹 47

星野 英樹 47

衝撃から至福の時間へ

淑徳大学公開講座「ヴェネツィアンビーズ」講師 中村 浩美 53

出掛けよう！近隣公園〜光が丘公園と和光樹林公園

淑徳大学国際コミュニケーション学部教授 西田 俊夫 53

池袋の場所の物語

出版社「之潮（コレジオ）」代表・淑徳大学公開講座「文学と古地図で

探る水際散歩」講師 芳賀 啓 54

「短夜」と「宵は待ち」

俳諧史研究家・淑徳大学公開講座「おくのほそ道」講師 山田喜美子 55

墨と黒と水の力

書道一元会会長・淑徳大学公開講座「水墨画」講師 近藤 祐康 55

立秋から晩秋の部

思い出の秋の味

淑徳大学国際コミュニケーション学部准教授 赤崎 美砂 56

実りの秋に想う

ジャパン・ハープ・スクール講師・淑徳大学公開講座「ハープ」講師 阿部 啓子 56

秋の夜長は東方美人

淑徳大学公開講座「器」講師 小澤 千恵 57

武蔵野の原

香道古心流・淑徳大学公開講座「香道」講師 黒須 秋桜 57

運動会とペン習字展覧会

淑徳大学公開講座「ペン習字」講師 林 拓篤 58

中国大陸でみた月

國學院大學講師・淑徳大学公開講座「万葉集」講師 城崎 陽子 58

寒い冬は八宝茶でおもてなし

淑徳大学公開講座「器」講師 小澤 千恵 59

お箸の国のかたすみで

詩人・淑徳大学公開講座「詩」講師 川口 晴美 59

立冬から晩冬の部

東京の初雪

詩人・淑徳大学公開講座「詩を書く」講師 川口 晴美 60

雪への思い

芸能研究家・淑徳大学公開講座「歌舞伎」講師 北潟 喜久 60

安政の大地震と鯨絵

筑波大学名誉教授・淑徳大学大学院客員教授 野田 茂徳 61

大寒の寒稽古

金春流能楽師・淑徳大学国際コミュニケーション学部講師 櫻間 金記 61

韓国逍遥

國學院大學講師・淑徳大学公開講座「万葉集」講師 城崎 陽子 62

高尾山の「火渡り祭」と修験道

武蔵大学講師・淑徳大学公開講座「日本の山岳宗教 修験道の世界」講師 西村 敏也 62

寒い冬は気功でパワーを内に蓄える

淑徳大学公開講座「気功」講師 服部 茂夫 63

それぞれの羈旅および雑歌の部

逆境にチャンスあり

秋山総合心理研究所所長・淑徳大学公開講座「ワークライフバランス」講師

秋山 幸子 63

生老病死における「氣の活用」

NPO法人「氣の活用法」理事長・淑徳大学公開講座講師

岡村 隆二 64

東京駅の赤レンガ

淑徳大学エクステンションセンター

岡本 勝人 64

平家物語と地名

文芸評論家・淑徳大学公開講座「歴史と文学」講師

菊田 均 65

人気の歴史散策

立正大学日蓮教学研究員・淑徳大学公開講座「法華経」講師

関戸 堯海 65

そのときどきの歴史散策

立正大学日蓮教学研究員・淑徳大学公開講座「法華経」講師

関戸 堯海 66

「ドロッカー生誕100年〜明日の羽ばたく」

ドロッカー学会推進委員

宗 初末 66

一生感動一生青春

(株)ケアリッチ代表取締役社長・淑徳大学公開講座「風水」講師

戸口 勝正 67

ALWAYS写真事始

写真家・淑徳大学公開講座「写真」講師

永島 浩二 67

青春の油絵と写真

写真家・淑徳大学公開講座「写真」講師

永島 浩二 68

一九六〇年代の新宿のバー

―「ナルシス」「カヌー」「茉莉花」「風紋」の記憶

筑波大学名誉教授・淑徳大学大学院客員教授

東京駅慕情

筑波大学名誉教授・淑徳大学大学院客員教授

山岡鉄舟について

料亭二葉十四代・淑徳大学公開講座「山岡鉄舟」講師 八木忠太郎

歳時記と人々の記憶

東京大学名誉教授淑徳大学教授

谷中春秋

淑徳大学国際コミュニケーション学部教授

季節を彩るスカーフ

ワイ・ダブリュ代表取締役社長・淑徳大学公開講座「スカーフ」講師

あとがき 淑徳アカデミアの第3号の発刊に寄せて

和知ヤス子 71

吉田 章宏 70

渡部 治 71

野田 茂徳 68

野田 茂徳 69

八木忠太郎 70

八木忠太郎 70

八木忠太郎 70

八木忠太郎 70

八木忠太郎 70

八木忠太郎 70

八木忠太郎 70

八木忠太郎 70

八木忠太郎 70

八木忠太郎 70

# 俳句の実作と鑑賞講座 作品集

講師 俳人 井上 弘美

月華集

井上弘美 抽

遠い日の波に揺れをり砂日傘  
一葉忌井戸のポンプの白き布  
梅日和秩父の山をはるかにす  
武蔵野の大地音なく初菫  
石ひとつ影ひとつばつて冬至かな  
きさらぎや胸の中まで光射し  
鬼やらひ闇押す声を放ちたる  
逆縁の姉一人座す秋の蟬  
宗祇水両手のなかに新樹光  
白木蓮闇に光のありにけり  
漆黒の螺鈿の扉春の宵  
初日の出天地ひとつの中にある  
麦青む兜太の秩父訪ね来ぬ

赤瀬川恵実  
長田 文月  
金丸 善信  
川口 南子  
国盛 千春  
沢田とよ子  
島田 千花  
田中 頼子  
田村 唯子  
中村 和夫  
二木 公子  
蒔田ユリ子  
武藤 三山

砂日傘

赤瀬川 恵実

立春やメープル色に椅子を塗る  
すかんぼを嚙り舌尖尖りたる  
尺取の縮んでみどり濃くなれり  
遠い日の波に揺れをり砂日傘  
一瞬の影を地上に夏燕  
椋鳥の群一樹に声のみ合へり  
鯉の口ぶつかり合つて秋暑し  
一葉忌  
本裁ちとなる晴れ衣裳桐の花  
聖五月悔いたるユダをいとほしむ  
天瓜粉守られし日々ありしこと  
しぐるるや巢鴨は四の日傘の華  
稜線の際立つ浅間冬に入る  
どの家も大根干してあたたかし  
一葉忌井戸のポンプの白き布

長田 文月

梅日和

金丸 善信

荒川の赤き水門草萌ゆる  
土手の牛そろりと立てり春の暮  
梅日和秩父の山をはるかにす  
熟柿あり食べ頃といふ妻のこゑ  
ちやんちやんこ卒寿の姉の畑仕事  
酷寒のテントはためく葬儀かな  
凍雲の重みを負ひて歩きけり

冬ざくら

川口 南子

武蔵野の大地音なく初茜  
一刷毛の紅梅のある雑木林  
花びらに蝶の交じれる川面かな  
水揺らす葉の重なりや梅雨の月  
白樺を通り過ぎたる霧の音  
山めぐり女人高野の登り口  
山深く白ただよはせ冬ざくら

白き絆

国盛 千春

つくしんぼ薄みどりなる翳を曳く  
むらさきの雨に見えたる野藤かな  
万緑の中へ中へとはぐれけり  
枯尾花光のすぢを通しけり  
石ひとつ影ひとつつて冬至かな  
寒牡丹菰のなかなる息づかひ  
鱈の身をほぐして白き絆かな

月祀る

沢田とよ子

きさらぎや胸の中まで光射し  
言はぬまま見送る別れ濃紫陽花  
訪ねゆくダンスレッスン麦の秋  
一人居の大盆に載せ月祀る  
神無月記録野ざらし兎小屋  
日の柚子も日陰の柚子も臥龍山  
冬の雨秩父御嶽いくまがり



山頭火

島田 千花

鬼やらひ闇押す声を放ちたる  
投げ入れし織部の筒の白椿  
鰐の群れ折り重なる目借時  
お台場の灯のゆるむ涼み舟  
夕顔のしらく浮きくる闇の中  
秋風や見知らぬ街のたたづまひ  
しぐるるや急かれて旅の山頭火

冬の蝶

田中 頼子

冴え返る窯場に引けり山の水  
金縷梅は光の針を蒐めけり  
料峭や一千年の神の座  
秋の風旧道草におほはれぬ  
逆縁の姉一人座す秋の蟬  
流星の白く走れる冬至粥  
母はただ眠るばかりに冬の蝶

新樹光

田村 唯子

階段を数へてのぼる竹の秋  
揚ひばり赤子の座る草蓆  
宗祇水両手のなかに新樹光  
川風をゆつくり滑る船遊び  
朝風の岬の先の岬かな  
山々のしづまりかへる星涼し  
読みさしの栞の蒔絵月今宵

白木蓮

中村 和夫

蠟梅の俯く花や溶くること  
きさらぎの水糸となる掛樋かな  
白木蓮闇に光のありにけり  
秩父路の蚕屋の空の春霞  
さし脚に鷺漁れる干潟かな  
冬鴟の一声山の寂として  
駅ひとつ過ぎしあたりの時雨かな

螺鈿の扉

二木 公子

ひと入れぬ傾斜に梅の盛んなり  
漆黒の螺鈿の扉春の宵  
空壕は風の抜け道濃山吹  
四万十へひろがる投網夏つばめ  
真青なる空へ枯れゆく落羽松  
通されてしばらくひとり虫時雨  
土塊の根を背負ひをり菊人形

今年竹

蒔田ユリ子

初日の出天地ひとつの中にある  
日だまりの土手に幼の風と糸  
花冷えやひとつ忘れてひとつ知る  
今年竹すつくとこのびて昼ふかし  
紫陽花に手をさしのべて太極拳  
朝百舌は今日のことぶれ確と聞く  
風来ればほむら立つなり曼珠沙華

麦青む

武藤 三山

敷石を踏み納めけり松飾り  
三椗の泡立ちて咲く宝登の山  
春の空講中法被列をなし  
麦青む兜太の秩父訪ね来ぬ  
九反五畝畦巡り来て豆の飯  
夏至の日の駝鳥に水を掛けてやる  
甲子園の歓声聞こゆ鱧の皮

# 淑徳大学公開講座

## 「佐藤孔亮の川柳入門講座」

講師 佐藤孔亮

〔根本智恵子〕

いつまでもチビという名のでかい犬  
お雛さま夜中にそつと足伸ばし  
夫婦喧嘩チャイムが鳴って痛み分け  
卒業のおまけに資格付いてくる  
ライバルと知らずに恋を打ち明ける

〔清水春子〕

終止符をつけるに迷う長話  
秋夜長老眼鏡のフルコース  
降りしきる雪の乱舞に見る墨絵  
しとしとと相合傘の梅雨もよし  
艶姿ゆっくり見せる百合の花

〔吉田小尋〕

ささやかに身の程に合う熊手買う  
眠れない部屋に羊があふれ出す  
再会に心が騒ぐ吾亦紅  
電車二本逃がすつもりで母と行く  
ミステリー読んで雷雨の効果音

〔真弓 哲〕

五百円あれば雨雲怖くない  
チャネル権捨てて家庭の平和維持  
子の甘え喜んでいた年は過ぎ  
就活に敗れ卒業見合わせる  
究極の退屈対策は昼寝

〔早川若丸〕

流し目はゆっくり客を魅了する  
卒業を待つて花咲くウエディング  
窓に咲く雪の椿と生きている  
人恋しふわりふわりと雪は舞う  
妻の目に今年は揃う子供たち

# 短歌の実作と秀歌鑑賞講座

講師 歌人 牛山ゆう子

## きさらぎの風

牛山ゆう子

湯にはなつ朝の和布のふかみどり胸にふはりと潮風よぎる

引き汐の浜をへだてて湾に向く岩の空洞陽にくらかりき

願ひごと告ぐる間もなく消えゆけり流星の尾に鈴の音ひびく

出ださざるわが幾年かきさらぎの風を聴きぬむ女雛と男雛

牡蠣ごはん食べにおいでとメールする沈丁の花かをるゆふぐれ

充足と充実の差のいかばかりほうとうぐひす初音清しも

水禽の発つ日まちかしこくびやくのつばさ紛れず川面につどふ

鷺一羽たかきこずゑに立つと見え病むかとも見え風にビニール

菜の花に吹く風寒し稿ひとつあきらめてわが思ひやすらぐ

川に沿ふさくらの並木気に満ちて日々に苔のふふむくれなる

## 葉 蘭

熊谷史子

庭端の葉蘭を摘みて笹に敷きキラキラしけれ素麺のせて

レジの人「またもお越し」と我に言ふ何やら嬉しデコボン香る

アメリカへ行く前の君の書きし手紙今も大事に桐箱のなか

半月を見つつ干し物する夜ふけ空をななめに流れ星ゆく

真夜独り飴ふふみつつ炬燵にて笑ひて暮らすも一生と思ふ

露、蕨たくさん採れてと好好爺汗して負ひ来父喜ばせに

春なんかなぜ来るんだいと雲に問ふ齡とるためと流れゆきたり

俯きて角のアパートまで歩き冬の風鈴今日も聴きたり

風邪に臥す君の看護に明け暮れて蜜柑実る木独り見上ぐる

街路樹のもみづる様を眺めつつ有田陶器の市へ向かひぬ

## 鬼灯

真庭郁子

久々に竿竹売りの声聞こゆ壁に夕かげ射しくる路地を

昨夜吹きし風に耐へたる野ぼたんの今朝ひらひらと落つるむらさき

開くたび秋の日の射すドア脇に「振り込み待つて」と立て看板あり

満月を背に浴びつつ帰るみち遠き約束思ひ出したり

生協の不揃ひトマトの敷紙にしばし見入りぬ短歌の欄を

鬼の子も明かり点さむ鬼灯のあかあかとして盂蘭盆会来る

口すぼめ鬼灯ならず祖母の背の小さかりしよあの日の縁側

図書館の天窓よりの風清し「む」の棚あたり「あ、うん」を探す

暗き雲の行方は知らずたちまちに茜に染まる秩父の峰は

はるかぜがひらがなのようにふいているたんぽぽわたの祭そつとゆらして

## 秋から冬へそして節分

石井弥栄子

萩ははや盛りをすぎぬそぞろ行く大名庭園に秋ふかみけり

涼やかな風吹きわたり曼殊沙華火の色見する庭をめぐりぬ

空合ひの定まらぬ夜のベランダに見え隠れする十五夜を見つ

暴風圏の進路を示す赤き円友の住む町中心にあり

父母の好みたりけりむかご飯炊ききて子らと墓前に食ふ

立冬といふも汗ばむ一日なり供華にたちまち蜜蜂の寄る

しゃりしゃりと吾が口中にある青菜植物工場に育ちたるもの

松に竹、藁縄土間に積まれゐて師走は夜半も植木屋忙し

花柚子のつぶら実しぼる夜の厨芳しき香のたちまち満てり

ゆるゆると焙烙揺らし祖母の煎る豆の硬さのいまはなつかし

# 「詩を書くって」講座

講師 詩人 川口晴美

2007.11.17 池袋 13:06

川口晴美

仕事の時間に遅れないように

駅の階段を駆け上って広い横断歩道の前に立つと曇り空

信号が青になるのを待つあいだ

きのうのちようど今頃 駅ビルの屋上から飛び降りた女のひとが

血を流して倒れていたという歩道のあたりは振り返らない

こわいからじゃない

百年千年とさかのほれば

たった今わたしが立っているこの場所で血を流して死んだひとだっている

だろう

こわいわけじゃない

ただ きのうの死はまだ少しあたたかくそのひとだけのものだから

そのひとのプライベートなものだから

じろじろ見たりするのは裸をのぞきみるのと同じだとおもう

わたしだけ見られたくない

けれど 信号がかわって動き出す人たちの流れのなかで

わたしは振り返って池袋パルコを見上げてしまう

今朝の新聞の写真では 屋上の縁の金網フェンスから地上まで  
白い点線の矢印がしるされていた  
八階建てのビルの壁面に

『PARCOカード新規会員募集中』の垂れ幕

写真にうつっていた文字がここではあまりに巨大で

躓きかける

ターミナル駅なのに池袋にはなじみがない

新宿区にある学校に通っていたのにその頃はほとんど来なかった

友人たちもそうだった

わたしたちの世界はまだ狭く池袋までで終わっていて

池袋から北の空間は地図上に印刷された記号として存在しているだけで

きつと池袋では大きな滝が流れ落ちていて世界はそこで終わっているんだ

と

みんなで笑った

今は横断歩道を渡って仕事に行く

滝は流れ落ちていないここはまだ世界の果てじゃない

わたしはそのひとと東京のどこかですれちがったことがあるだろうか

あるかもしれないあったとしてもおかしくはない

山手線のなかとか渋谷のスクランブル交差点とか

そのひとにとってはここが

世界の果てだった

きのうの池袋13時が果てだった

飛び降りたとき下にいた男のひとにぶつかって

男のひとは重体

そんなふうに

とつぜん現れた世界の果てに巻き込まれてしまうことだってあるかもしれない今この瞬間のわたしの足元に

大きな滝が出現してわたしの世界の果てとなったとしてもおかしくはない

いたるところに世界の果てはある

生きものの数だけ死を降り積もらせてこの地はできている

数え切れない死を踏んで

地を踏んで

少しづつ果てを先に延ばしていくだけ

池袋13時6分

わたしはもう少し遠くまで

赤信号になる前に

横断歩道を渡っていく

(第十回山本健吉文学賞・詩部門受賞詩集『半島の地図』(思潮社)から)

オフィーリア

『シェイクスピア『ハムレット』の舞台より』

青山夕璃

曇りガラスのように

無表情な乙女がひとり

川のほとりで

無心に花環を編んでいる

震える花びらから

零れ落ちる言葉たち

きんぼうげ……純潔

ひな菊……無邪気

いらくさ……残酷

紫蘭……お互い忘れないように

「その冠をかけてくださいな」

罪深い柳の小枝が異界へ誘惑

水の迷路に散った

悲恋のオフィーリア

水音が 狂気の歌になり

人魚になって流されていく

よく見ると

オフィーリアはわたしの顔をしている  
心を無くしてしまったのは  
わたしなのかもしれない……

岡野 博

## 愛情は濁点だ

自分にはぐれたまま  
未だに  
どこへも  
辿り着けない

(詩集『風のアルビオン』より)

へへへ これは福島県にある山の形だったらしいのだ。近くにある猪苗代湖の湖面に映ると くくく こんな形として見えていたはずなのだ。所が、明治年代にドカーンと大爆発してこうなった ひひひ 爆発によって出来た福島県の五色沼から眺める裏磐梯の山の姿に見えるのだ。これを見た女が慟哭した。

泣きやまぬ童女のやうに慟哭する

—— わたしもうぢき駄目になる

高村光太郎詩集「智恵子抄」(山麓の二人)

二つに裂けて傾く磐梯山の裏山は

詩集「智恵子抄」(山麓の二人)

童女の泣きやまぬ精神の宿命的な破裂だったのか。

この二人は永遠に寄り添う濁点だ

二人で守り抜いた愛情の濁点だ

決して汚点なんかじゃない。僕は濁点をこの二人の愛情の永遠のシンボルマークに決めた。

—— みちのくの安達が原の二本松松の根かたに人立てる見ゆ ——

高村光太郎詩集「智恵子抄」(樹下の二人)

この「樹下の二人」の二本松は幹を見ると三本にわかれていた。実際に目にしたがその内の一本が切り落とされて二本松市の観光スポットになっていた。その松は小高い丘の上の広場に立っていて舞台装置のような岩の上に「樹下の二人」の詩碑が建立されてのせてある。この広場に立つ三本の幹の二本松と詩碑はこんな形をしていたのだ おおお 所が、二〇〇七



年に枝が枯れて根元から切り落とされてしまう。だからその後に残る丘は  
つつつ こんな形をしていてその丘に立つ人は ととと その丘に足を  
踏み入れて訪れる人は ををを こんな形をしているのだった。

所で、僕はこの時この丘に足を踏み入れたのだ。たまたま大学があつち  
で福島郡山に四年生活していたから詩作を始めた二十三歳の頃から毎年  
必ずここを訪れるようになっていたのだった。通称「詩碑の丘」と呼ばれ  
ているこの丘に立つ僕はこうなる。

しひのおかのおかのひろし

二〇〇八年の夏、地元の方が管理する新しい松に植え替えられていた。  
こんどの松は直幹といって一本立ちの一本松なのだ。その一本松がこれか  
らすくすくと育ち四方に枝を伸ばして立つ丘は ままま 風に吹かれて揺  
れ動くとききき 松の花は十返りの花とも言つて百年に一度十たび咲く  
と云われ祝言とされている。松は千年の命らしいのだ。「樹下の二人」の間  
で養われた愛の詩集「智恵子抄」はこの先千年の命を保てるであろうか。

きつとそうだ、そうしよう濁点だから

僕も一人前の読点になろう、

いまはもういない僕の心の中の片隅に寄り添う郡山女子大学の妻はハタ  
チの誕生日に会った切りだ。年を取れば取るほどぼくはだんだんろりこん  
になる。心の中の妻は妹となり、もうしばらくすれば娘の年頃となる。僕  
は勝手に一人で歳を食って生き伸びて生えた白髪まじりの頭となったが、  
心の妻はいまでは孫娘の年頃になった。ろりこんも極めれば人類愛だ。心  
の中の妻はハタチのままの孫娘。

僕もそろそろ心のグローバルな恋を試してみたいなあ—— ほんと哀れな  
男だ。

内からの爆発であなたのやうに、

あんないきいきした新しい世界を

命にかけてしんから望んだ

さういふ自力で得たのではないことが

あなたの前では恥しい。

高村光太郎詩集「智恵子抄」報告（智恵子に）

毎年必ず二本松と智恵子記念館の智恵子のはり絵作品を見に訪れていた  
僕。いつかきつと僕も一人前の詩人になって、いまはいない心の中の妻と  
智恵子のはり絵の前で、決して恥しくない報告ができるようになりたい。

# 一字

岡野 博

そろそろ四十歳になる僕はツとシがいまだに書けない。

アルバイト先の弁当工場でコンビニの手巻おにぎり和風ツナを検査係へ和風シナと伝言書きしてしまふ。正社員の二十代に、これじゃ和風なのかシナなのか、意味が通じないよと笑い口で睨まれる。僕のやっているペンの軌跡を視覚化すると□軌跡を消すと□この(つ)と区別するため(し)に影響が出てくる。□軌跡を消すと□

二十代の頃の僕は手書き図面の仕事をしていた。製品の油圧ジャッキを油圧□ヤ□キ

と書いてしまい製造現場から文句が出た。「うちの会社は油圧じゃつきを売ってんだよ、油圧□ヤ□キなんて商品作ってねえーよ、これどーやって読むんだよ。」その場に居た直属の上司は笑いながら、そとりを書いてみるといわれた。ソとりは書けるのだ。上司が言うにはりにもう一つ付けければツになるのだ。

書いてみる リ□□ 待てよ 違うよ

書き順が違うだろ もう一回書いてみる

リ□□ そうじゃないだろ外から先に書くんだよ

□□□ それでいいんだ

と教え諭されたがいまだに書けない。

靴ひもがいまだに結べない。

その会社で地元の夏祭りに参加しヤキソバ出店の手伝いに呼び出された時のエプロンの後ろリボンも結べない。同期の女性社員に「岡野君十字結びって縁起が悪いのよ」と後ろ向きで結び直してもらった。「あらいやだ靴ひも

も結べないの」と笑われた。ひもは先に左手で輪を作ってから結ぶと外見が一字形の蝶々結びになる。けれども僕のやっていた結び方は先に右手で輪を作ってから結ぶ十字結びだったのだ。それまで全く知らなかった。僕の人生も運も月もないつたなさであったがいまだに結べない。

エベレストがどうしても言えない。

十代だった。高校の時、クラス担任でもあった英語の女教諭の授業に北米からやって来た女性外国人講師ホワイトティチャーを伴っての授業で、女教諭が「これからキャサリン先生が幾つか英語で質問を出されますからさされた人は立ち上がって英語で答えて下さい」ホワイトティチャーの第一の質問が「世界で一番高い山の名前は何か」だった。いまだきの日本の高校生に対してそんな質問はなからうとあつげにとられた僕は幼い頃にどうしても口に出して言えず母と兄にちゃかされている録音テープがあつたことを急に思い出して薄ら笑いを浮べているとホワイトティチャーの指が僕をさしていた。立ち上がった瞬間、頭の中が一変して雪男になる。机の上に指で英語のスペルを書き出そうとしたが忘却している。あの録音テープを頭の中でぐるぐる回そうとしても遠の昔に捨ててしまつてその時の会話の音が消えている。教室の白壁に張り出されている掲示ポスターの文字のどこかに書いてないか首を回してみてもどこにもなく真つ白な文字に見えてくる。首を傾げながら心の中で(エベレストだつたっけエベレストだつたっけ

ハーフtoハーフならイチカバチカだ けれどもデンジャラスだ マチがいたら そのトラウマはディーブだ このピンチをスルーするハンドを探せばいいのか どうしよう あれがあるのか しょうがない マイベストだ)

前方に顔を向けると女教諭が「ようやく思い出したみたいですね」と笑つ

ている。

—— Chomolungma

クラスメイトに雪崩のような笑いが湧き起こる。ほっとした僕はこの笑いの雪崩の上をスノーボードで滑走するような爽快感だ。女教諭も大笑いしている。その隣りのホワイトティチャーだけがこの笑いに啞然とした静寂の雪のマウンテンのように僕を睨みつけている（僕のスノーボードは一体どこに着地したらいいのだろう）

大笑いの雪崩が静まると、一人雪山のようなホワイトティチャーには着席しているヤーパンの顔が禿げ山のようなモンキーフェイスに思えたかもしれない。雪肌のような表情の奥から凍てついた光が僕を睨みつけてくる。みんな黙り込んでしまい真っ白な極寒の壁の教室となってしまった。立ち居ずらいスノーボードの上の僕は雪山との一騎打ちのような立場にまごつきながらあの世界一の雪嶺の頂点の名を思い出せないでいるフリをして何とかしてスノーボードの上からこの教室の真っ白い時間と極寒の空間を押し潰そう押し潰そうとしていると

どこからともなくスキーの板で滑走してくるささやかな音のようなものが聞こえてくる。サーサーサー サツサツサツ こっちの音はパラレルの滑りのようだ。天啓を受けたように見上げる顔の天井の色までが雪雲のようだ。トタンに音が消えるとこんどはスキーの棒で雪をつつくような音になった。よく見ると雪雲の天井に黒い穴が幾つもあいてくる。こんこんこん さあーさあーさあーこんどはミニチュアのスキー板が天井を滑走しているような音が。でも人間の声なのだ。驚いて横を向くと隣席の中里君がこっちを向いてささやいている。中里君の指が雪原のようなノートの上に十個も書いてある「エベレスト」をたたき始めた。雪原のノートの上には真っ黒な雲が。さっきの音は黒雲のシャーペンの音だったのか。

まるでエベレストのような真っ白なこの部屋で遭難しかけた僕はようや

く「エベレスト」と応えることができず無事救出された。何も知らない看護師のような担任の女教諭が「質問はこれ一つだけにしてキャサリン先生授業の進行の方をよろしくお願いします。」とフォローしてくれて僕は担架のような椅子に腰を落とすことができたが非情なほど白けた授業となってしまうた。

もう一度

幼い頃に戻って

記憶を白紙に戻さないと

身につけてしまったクセは

直らない

四十にもなってアルバイトの僕はパートの清水さんに和風ツナの話をしてきた。「うちの息子もそうなのよ」と伝票の余白に「和風シナ」と書き出してくれた。「あつ僕の書き順と同じだ」と笑っていると「このままだと将来が心配だわ」と言うので「大丈夫だよ僕だって大学卒業できたもん将来はきつと詩人になれるよけれども十年ぐらいブータローやることになるかもしれないけど」「わたしあきらめてるの」と言うから僕は「あきらめた方がいいよ直すのは、将来は何とかなるよ」と言ってやった。

## 空き地の三月

中本 道代

いつも散歩で通る道端に、小さな空き地がある。空き地の奥はテニスコートの塀になっていて、あまり人の通らない道だ。

都内の住宅地に空き地は少ない。空き地があってもそれは今だけで、すぐに家が建てられるのだろうという気配をもっているが、その空き地はもうずっと整地もされず、でこぼこのまま放置されている。わたしが好んでその人けのない裏道を通るのは、その空き地に会いたいから。一瞬で通り過ぎてしまうような場所だけれど、心に小さな喜びが生まれる。何の用途もなく空いている土地というのは珍しく、土地本来の姿を見るような気がするからだろうか。なぜなのだろう、と謎めいた感じがするのもいい。

夏のあいだ伸び放題に伸びた草が冬はそのまま立ち枯れているけれど、三月にもなるとみるみるうちにやわらかな緑があらわれて殖えていく。「踊子草」や「仏の座」など、可憐な花も顔を見せる。でこぼこの地面も緑に覆われると、隆起の豊かな山脈や谷や平原のように見える。小さな土地も、複雑で広大な地上の風景を遥かな高いところから見ているような気分になる。うち捨てられた自由な土地が、どこにもない輝きを見せるのだ。

(豊島新聞 2010年3月10日)

# エッセイを書く

講師：中本道代

## 異色の海外旅行

石川 多了

近年になって海外旅行に大きい変化が起っているという。もう、グルメ、観光、美しい自然、民俗、文化などについては、TVや新聞で十分な情報と映像が得られるので、海外旅行の目玉ではなくなっているという。一方、新しい体験を求める新人類の登場で、海外旅行が様変わりしているのだともいう。

私が長期間滞在したシリア・アラブ共和国の事例でみると、ホテル前の旅行社に大きな看板があり、「四輪駆動車で砂漠を走ろう」とある。早朝に、英米人や仏人の男女グループがはでな軽装で生き生きした顔をし、誇らしげにジープ風の自動車で颯爽と出かけてゆく姿は頼もしい。しかし、夕方になって極度の疲労に加え汗と砂埃にまみれ、見るも無惨な姿で戻ってくるのを観るのは痛ましい。

しかし、私は猫の額程度の鳥取砂丘や浜松砂丘しか知らなかったのも、特殊な風景に挑戦してきた彼等を羨ましく思う。私も小さなシリア砂漠を二、三度往来したが、調査団としての私達は、厚い鉄のカーテンで覆われているような自由行動の許されない旅行であり、舗装された高速道路を疾走するだけの見聞である。途中の休憩で、砂丘に登ったり、襲いかかる危険な砂嵐に果敢に飛び込むなど許されるわけがないのが残念であった。

## 中東思いつくまま

石川 多了

私は一九九九年から二〇〇一年に亘り、鉄道の技術支援のため中東のイラン・イスラム共和国とシリア・アラブ共和国に、偶然ではあるが、両国ともラマダン（断食月）時期に滞在した。これら両国について私の観たまを記してみたい。

さて、私たちは中東諸国についてどこまで知っているだろうか。イスラム教国家として、シリアとイランを対比してみよう。

イランは「イラン回教共和国」とあり、国名からして回教国であることがわかるというものである。外国人でも女性はルサリ（ベール風の布）着用を強制される。しかし、ラマダンに関しては、子ども、老人、妊婦、外国人、三〇キロ以上の旅行者は適用が除外されている。一方で、無許可での女性の撮影が禁止されており、酒類も全面的に禁止である。

技術支援の目的は、カビール砂漠を横断する貨物新線建設プロジェクトへの技術協力である。

飛行機で現場調査に出かけたが、テヘランを出発してしばらくすると同行の鉄道技術者の一団から「三〇キロを越えたぞ」の声が上がリ、以後、アルコール抜きではあるが、飲み食いのドンチャン騒ぎが起った。

一方、シリアでもイスラム教が普及しているが、ラマダンには強制されない。「やりたい者だけやれ」といった感覚である。女性の撮影と酒類は自由である。しかし、集合住宅の撮影だけは許可が要するという。大臣級といえども、集合住宅に一般市民と一緒に住んでいるので、カメラを向けるとスパイ容疑をかけられるという。日本の政治家の超弩級豪邸住まいとは大違いで、ここでは豪邸住まいはアサド大統領だけだという。

ダマスカスを日曜日の夜出発する「オリエント急行」に、アレップから



## 寒い朝

岡田 照子

トルコ国境まで乗せてもらった。列車は寝台車と優等車がそれぞれ一両ずつ二両編成で、イスタンブールまで三十六時間で走るといふ。途中、渓谷の手前で停車したので事故かなと思つたら、機関士と機関助手が降りてきて、渓谷に架かる「ハラダラ鉄橋」をバックに記念撮影をしてくれといふのである。のどかな風景である。

電話交換所に日本には現存しない超オンボロの紐式交換機があり、写真を撮れといふ。女性交換手が作業中であつたが、カメラを向けると手に受話器を持ちポーズをとり、これで撮ってくれといふのである。

さらに歴史博物館の見学、オリーブ石鹸の買い出し、アサドダムやアレツポ城砦の見学、スーク（市場）での買い物など、多くの思い出をつくつてシリアを去つた。

五時に目を覚まして本を読んでいると、ガラガラと雨戸を開ける音がした。六時半なのだ。いつも同じ時間に近所の家の雨戸をあける音がする。夫も目を覚ましたらしく「六時半だ。起きなくっちゃ」と言いながらぐずぐずしている。なかなか起きられない。私は、今日の朝ごはん何にしようかなと考えていると、ヒジキの煮ものがあることを思い出した。おいなりさんでも作ろうかなと思つて煮たものだった。そのおいなりさんから思い出すことがあつた。

関西に初めて行つた時、あぶらあげが小さいのにびっくりした。どうやっておいなりさんを作るのだらうと悩んだあげく、四角いあげの端を少し切つて、かんぴょうを巻いて俵形のおいなりさんを作つた。それから気を付けて見ると、関西では四角いあげに斜めに包丁を入れ、三角の形にして混ぜご飯を詰めるものだった。関東から行つた私は、かやくご飯が混ぜご飯のこととは知らなかつた。ところ変われば品変わるで、初めてのことがばかりだった。しばらく布団の中で夫と、子どもの頃食べたいなりずしの話が續いた。

もう起きなきゃと思ひながらもなかなか布団から出られない。「さあ、朝ごはん作らなきゃ、起きよう」と、掛け声をかけて起きた。七時近くになつてしまつていた。

寒い朝は、布団のぬくもりからなかなか抜け出せない。「冬はつとめて……」と寒い朝を書いた枕草子の一説を思い出していた。

## 老いる

岡田 照子

今日は天気もいいし、家の中にいるのもなんとなく憂鬱になり、昼ご飯用にとパン屋さんまで出かけた帰り道のことでした。

「まあ、しばらく」と年配の女の人から声をかけられた。私は咄嗟に誰だかわからず

「あの、どちら様ですか」

「ナカノセツコです」とその方は答えた。

それでも私は分ならず、頭の中でナカノセツコさんって知り合いの中にいたかしらと、思いを巡らしていた。しかし、私の記憶の中には出てこなかった。

「母は広島生まれで、とつてもしつかりしていたのよ。父も母も亡くなって、夫まで亡くなって私一人ぼっちになってしまったの。さびしくて、さびしくて」

わずかに、二分の間に同じ話が三回も出てきた。

「お墓は広島にあるのですか？」

「お墓はこの少し先の高台にある」と言う。

「そこのお墓は、地元の人のお墓ではないのですか？」私は近くにある、高台のお墓を思い浮かべていた。

「ええ、山の上にあるの」少し違うかなと思いつつも

「九州の人は毎日お墓参りに行くというから、ナカノさんも近かったらお墓参りに行ったら」私は無責任に話を合わせていた。

「どちらにお住まいですか？ 住宅団地？」

「グリーンハイツの少し先、息子も娘も横浜や東京に住んでいる」と言う。

グリーンハイツが私にはわからず、首から何かを下げて洋服の中に入れて

いたので、この先に老人ホームや病院があるのでもしかしたら認知症かなと思ったが、「散歩楽しんでください」と別れてしまった。

家に帰って昼食中も気になって仕方がなかった。一人ぼっちになって少し認知症が入ってしまったのだろうか。私もあと何年かであるようになるかもしれないと思うと、寂しい気がする。

義姉がやはり少し認知症が入ってしまったって、何べんも同じことを聞いた、話したりする。「この頃すぐ忘れてしまった」と言っている。その上重い病気にもなってしまった。お医者さんが病名を言っても覚えられないようだ。甥は「告知しようと思ったがもういい、好きなようにさせる」と言っていた。まだ、家族に囲まれて生活しているからいいが、今日の人のように一人ぼっちになってしまったら、寂しくて寂しくて、みんな忘れてしまいたいと思うのかもしれない。

私も娘二人がお嫁にいつてしまったので、一人ぼっちになる可能性がある。老いるということを考えさせられた。いつまでも元気で、ぼっくり死ねたらいい。誰もがそう考えているのかも……。

私の姉は、今までぼっくり寺などに行く、「八十才過ぎたら、ぼっくり死なせてください」と拝んでいた。しかしこの間お不動様の裏のぼっくり様に拝んでいるのを知っていると、「百才になったら、ぼっくり死なせてください」と言っていた。

「いつから、寿命がのびたの？」と聞くと、姉は「だって、もうすぐ八十才になるんだもの……」と澄ました表情で答えた。

## 中国の近未来

氣多 保雄

最近のマスコミは中国のGDPが今年中に日本を追い越すとか、自動車生産が世界一になるとか、中国脅威論を報じている。しかし私は中国は脅威よりむしろ問題点が余りにも多く、よほど改革せねば崩壊に向うのではないかと思う。

まず、日本の十倍の人口十三億がいる中国であるので、一人当たりのGDPは十分の一となる。自動車生産量もしかり。しかも漢民族以外にチベット族等五十五民族が自治区に住み、中国政府の監視と弾圧を受けている。一九八九年の天安門事件後、安価な労働力による外国資本導入に狂奔して世界の工場となり経済成長を目指す、沿岸部と内陸部、そして都市部と農村部の格差は広がるばかりで、それに幹部の腐敗が輪をかけて、その上急速な環境破壊が追い討ちをかけている。およそ自由と民主主義にはほど遠い共産党独裁が、これ以上長く続くとは思えないのだ。

ソビエトが、ポーランドの非共産党政権成立、ベルリンの壁崩壊、東欧の自由化等により、一九二二年に誕生し六十九年続いた共産党独裁国家の終焉を迎えたのが、一九九一年だった。これは軍備増強による経済破綻と、国民の自由化、民主化の要求によるものだったと思う。中国よ、一党独裁をやめ、自由化民主化を早急に進めねば、ソビエトと同じ道をたどると知るべし。

## 懐かしい猟犬の物語

氣多 保雄

今日このごろ、歳のせいかな、しきりと昔の少年時代を懐かしく思い出して仕方がない。きつと、つらかったことや、しんどかったことも有った筈だが、不思議と楽しかったことばかりを思い出すのだ。その内、かなりの部分を占めるのが、愛犬たちとのかかわりあいである。祖父が鴨猟やキジ猟に連れて行くために猟犬を複数頭飼っていたのが裏庭の囲いのなかにおり、僕の幼稚園、そして小学校からの帰りを待ちこがれていたのだ。帰宅するとまず台所に行き、朝の味噌汁のだしがらのいりこや、リンゴの皮その他、そして僕の三時のおやつを持って裏庭に急ぐのだ。飛び掛られ、顔じゅうなめられながら一緒におやつを食べるのだが、猟犬として訓練されているので、「マテ」と言ったらどんなに欲しくても「ヨシ」と言うまで待っており、ついつい可愛さのあまり、自分のおやつを全部やってしまうこともしばしばだった。なかでもポインターのジョンとは非常に仲が良かったので、近所の遊び友達とさそいに来ても、どちらにするか迷ったことを思い出す。

春休みの、ある猟の一日を思い出してみよう。前日の昼下がりに、祖父が表座敷の広いベランダに敷物を出して、収納庫より猟銃その他一式の道具を出すことから始まる。まず散弾作りで、直径約二十五ミリ、長さ六十ミリほどの紙筒に鉛弾を何十個か流し込み、火薬と信管の付いた金属の蓋をするのである。危ないからと触らせてくれなかったが、あかず眺めていたものだ。この弾作りの音や、銃の手入れの油の匂いや気配をいち早く察するらしく、二十メートル近く離れた裏庭の囲いの犬たちが、クンクンと囲いの中を廻りだす。猟犬の本能が騒ぎ出すのだ。



一夜あけて朝食を済ませると、祖父は獵服に弾帯を腹に巻き、二連装の銃を持ち、僕はジョン、そして時にはジロ（秋田犬）などの革ひもを持ち出発、海側めざして獵場に急ぐのだ。ほんの十分も歩くと河口堤の手前、葦の群生した沼に到着する。首輪からひもを放し「アト」と言うと、ジョンは静かに僕のすぐ後ろをついて来る。そして我々の何十倍の能力をもつ耳と鼻で、鴨のひそむ茂みを察知すると、サツと地面に伏せをして知らせる。祖父が銃をかまえ「ユケ」の合図をすると、まっしぐらに沼に飛び込んで行くのだ。

不意をつかれて飛び立つ鴨をバーン、外ればもう一つバーンで、殆んど命中する。するとジョンは、鴨が落ちた水辺にまっしぐら、啜えて急いで我々のもとへ帰ってくる。「ヨシヨシ」となでてやりながら、時には濡れた身体をふいてやったものだ。犬ほど主人に忠実なものはいないのではないか。その時の嬉しそうな満足そうなきぐさを忘れられない。

さて一発バーンとやると、まず当分周辺の獵は無理となる。次は河口の橋を渡り、時間をかけて裏山の山里にキジを探しに行く。運が良ければ小麦畑でキジに遭遇するのだ。二、三十メートル先の小道を飛び跳ねながら畑に行くキジを見たこともある。勿論ジョンはまっしぐら、驚いて飛び立つキジの運命や哀れである。鴨ほどすばしこくないので、先ず百発百中である。ただエサをついばむ時以外は森林の上にいるので、犬といえども如何ともしたい。

山里をさんざん歩き回って、手ぶらということもしばしばである。しかし山の稜線で食べる持参の握り飯のおいしいことは何物にもかえがたい。ジョンも日頃の大麦めしでない握り飯を、もつとゆっくり食べればいいのに、アツと言うまに飲み込んでしまう。

帰途、再度鴨の獵場をのぞくと、運次第で収穫がある場合もあるのだ。

夕刻、家人が待ちわびる帰宅をすると、祖母が早速鴨鍋のしたくをはじめ。僕はジョンの身体を洗い、ブラッシングして夕食を与える。そして、ゆっくり風呂で手足をのばし、本日の楽しかったことどもにひたるのだ。

やがて夕食の鴨鍋を囲むのだが、祖父が一杯やりながら、鴨肉を目を細めて味わうのを眺めながら、自分はジョンが啜えて来た時の鴨の様子を思い出して、嘔まずに流し込む始末で、豆腐とか野菜を懸命に食べたのだった。

恥をさらすと、小学校の理科で「かえる」の解剖でさえ逃げ出して、友にからかわれたほどで、後に進路問題で親戚中より医者になれと強請されたが、「かえる」の解剖でさえ卒倒したと大げさに話して、勘弁してもらったものだ。イヤハヤ……。

これでジョンとの獵の一日は終りとする。又の機会にジロの思い出も、そして少年期はもつぱら犬を愛したのが、東京に出てきて迷い猫を飼ったのがきっかけで、苦手だった猫が大好きになった思い出なども書いてみたいと思う。

## ハーモニー

長瀬 瑠以子

ハーモニーはスコティッシュホールドという種類の濃いグレーの毛並みが美しい猫で、私の大切なパートナーである。文句も言わず飼い主の人生の紆余曲折に付き合ってくれてはや十五年。生まれつきのでんかん持ちで、何度発作を起こしたことが。抱きかかえて発作の治まるのを待つだけでどうすることも出来ず、こちらのほうが泣きたくなかったものだ。

ところが不思議なことに年を取ると共に発作が出なくなり、獣医もびつくりするくらい元気だ。さすがに足は弱くなっているが、食欲も旺盛、好奇心も衰えず、外で猫の喧嘩が始まると待つてましたとばかりに出て行く。彼女は私の家族であり、親友であり、そして決して裏切らない恋人の役目まで果たしてくれている。あと何年一緒に暮らせるのだろうか。そう考えただけで胸が苦しくなる。

頭を撫でながら「長生きしてね」と言うと、ゴロゴロと喉を鳴らしながら尻尾をクルリとまわした。「わかってますよ」とでも言いたげに。

## F先生の思い出

長瀬 瑠以子

一月二十七日という日をどうしていつまでも覚えているのか、自分でも不思議だ。毎年この日が近づいてくると、ああ、もうすぐ先生の命日だなあと思う。思うだけで何をする訳でもない。あまりにも長い年月が経ったせいで、もう先生の顔も声もはつきりとは思いつきりとは思い出せなくなってしまった。

父の仕事の関係で、小学校時代は転校の連続だった。一番短い学校は十月しかいなかった。四年生の終わりに転校して、卒業までいた小学校で担任として出会ったのがF先生だった。私の目から見た先生は、父より少し若いくらいで、四十歳代後半だったと思う。背が高くいつも地味な背広を着ていた。教室が騒がしくても大きな声で叱ったりせず、静かになるまでじっと待っているような先生だった。

当時夏休みの宿題に必ずあったのが、読書感想文だった。私は本を読むのは大好きだったが感想文は苦手だった。五年生の課題図書はガガーリン少佐の『地球は青かった』で、宇宙飛行という夢のような物語をわくわくしながら読み、珍しく一気に感想文を書けた。提出してからしばらくして先生に呼び出された。

「この感想文はとても上手に書けています。学年代表としてコンクールに出すから、きれいに清書してきなさい」とニコニコしながらおっしゃった。

二期期になっても私はクラスに馴染めず、友達も出来なかった。そんな私の書いた感想文が誉められて、嬉しくて嬉しくてスキップしながら家に帰った。

あとで見てみたら、何ヶ所も赤インクで添削されていた。先生は上手だと言ったのに、とちよつとがっかりした。ところがその読書感想文は市内コンクールで銀賞になり、県まで送られて文集に載った。こうなると現金

なもので私はすっかり天狗になって、自分は作文が上手なんだと思い込んでいた。

一つ自信がつくと、授業中手を挙げる回数が増え、積極的に発表出来るようになった。先生はことあるごとに私に責任のある役を与えて下さった。私も期待に添うように努力したので、徐々にクラスの皆が話しかけてくれるようになり、友達が出来た。先生はそんな私の変化を静かに見守って下さっていた。通知表には「よくがんばっています」と毎回誉め励ます言葉が書かれてあった。私は認めてもらったことが嬉しく、勉強も学校も好きになっていった。

六年生の後半になって、先生は体調を崩されしばらく学校を休まれている。ある日、母に連れられて先生が入院されている病院にお見舞いに行った。病室のベッドの上に起き上がっていた先生は、学校とは違って見えた。寝巻きの上に半てんを着ていて、よその知らないおじさんのように思えた。私は何だか恥ずかしくて、母の後ろに隠れるようにしてろくに話も出来なかった。帰るときにやっと「早く良くなって下さい」と小声で言ったら、先生は微笑んで頷かれた。

その夜母が父に「黄疸がかなりひどくて顔もむくんでいたから、あまり長くはないわ」と言っているのを聞いてとてもショックだった。そんなことを平然と言う母を嫌だと思った。それに私には先生がそんな重病には思えなかったのだ。

でも母の見立ては正しく、それから間もなく先生は亡くなられた。私はそのあとのお葬式や代わりの先生のことなどを何一つ覚えていない。卒業までの二ヶ月をただぼんやりとうつろな気持ちで過ごした。

お墓は山すその細い道の突き当たりであった。私は高校卒業まで毎年命日にお墓参りに行った。でも大学に進学しそのまま東京に残って、故郷は遠くなってしまった。

先生の命日が来るたびに、スキップして家に帰ったあの日のことを思い出す。ずっと書くことが好きで、今もこんな風にエッセイを書いている私をどう思われるだろう。先生が亡くなられたときの年をとくに過ぎてしまつて、昔の教え子だとはお判りにならないかもしれないが、いつかまたお会いしたときに、「上手に書いていますね」と誉めて頂けるよう、これからもずっと書き続けていきたいと思っている。

毎朝新聞を取りに一階まで行かなければならない。住民の出勤時間を避けるように行くのだが、うっかりすると、十二階から乗る強烈な整髪料の臭いをさせる女性と一緒にになってしまう。手で鼻を覆ってしまいたいほどだ。吐きそうだ。

四十代後半にみえるその女性はびしっとした身なりで、上等なバッグを提げている。多分職場で管理職なのだろう。直接臭いと言える人がいないから、不愉快に感じる人がいることに気付いていないのか。それとも、不愉快に感じるのは私だけなのだろうか。本人はよい匂いだと感じているのだろうか。誰もがイヤナ臭いのする整髪料を商品にするはずがないし……とエレベータが一階に到着するまで考え込む。

香水のにおいの強い友人がいる。私と同年齢のだが、モーレツなにおいだ。多分加齢臭を指摘されたことがあって、トラウマになっているに違いない。臭いと言え、人間関係は崩壊する。修復不可能だろう。加齢臭は男性より女性のほうが実際は強いそう。だが、女性は化粧品品のにおいで中和され、男性ほどひどく臭わないらしい。

源氏物語、宇治十帖の薫君は体から芳香を放つ男性として描かれている。そういう男性はいるらしい。残念ながら私は出会ったことはない。

薫の競争相手の匂宮は負けまいと、よい香りを焚きしめた衣を着る。こちらには体臭ではなく、香水と同じ。源氏物語では、衣に焚きしめる《香》の話が度々登場する。風呂に入っていない平安時代の貴族たちの体臭隠しだろう。

現在も消臭剤のあふれる、体臭を消す時代だ。電車とかコンサート会場などの人の集まる場所でもにおいはしない。草食系男子は無臭のイメージがある。無味とは言わないが。

多摩地区の情報誌「アサヒタウンズ」が三月で廃刊になる。朝日新聞からの補助金が廃止になり、販売店の買い取りも経営が苦しく困難になったからだそう。

私は一九九八年に小平市へ引っ越して、「アサヒタウンズ」と出会い、「ひろば」欄に投稿した。

—自然のままにすてきな言葉—（十年前の投稿文）

小平市に転居してきて面白かったのは、野菜の無人スタンドでした。農家の庭先でトマトやきゅうりが並べて売られ、お金は貯金箱のような箱に入れるのです。最初に買ったのは親指ほどのタマネギでした。サラダにして生で食べたり、スープにしたりして食べました。しばらくして無人スタンドに行くときタマネギは赤ちゃんのこぶしほどに育って売られていました。バケツにユリの花もありました。二、三度買うと、ユリは枝豆に変わりました。農家のひとに

「ユリの花はないの?」

と聞くと、

「また、来年ね」

また来年……なんてすてきな言葉でしょうか。ここでは一年のサイクルで時が流れているのです。私が教員の現役だった時は一週間が単位でした。週二時間の教科は年間三十五週分七十時間授業をすること。月曜日も火曜日も区別が付かないほどあわたたくし過ぎ、週末になって、ああ一週間が過ぎたと思うのでした。一週間また一週間と、時は飛び去り、季節の変化を受け止めている余裕のない毎日でした。



七月になるとブルーベリーがスタンドに並びました。一袋六百円でした。甘く煮てヨーグルトにかけて食べました。おいしかったのでもう一度買に行くところありませんでした。私は未練がましく聞きました。

「ブルーベリーはないの？」

「今年は終わり、また来年ね」

と農家の主婦は言いました。

六十二歳の私が、新しい生活に張り切っていた頃を思い出す。なにもかも新鮮だった。その後市民合唱団に入り、その様子も投稿した。

―アレグロで歩く「体中で音楽」―

練習が終わり九時半過ぎに、歌いながら青梅街道を横切って歩いた元気な自分の姿に出会い、ため息が漏れる。七十二歳の現在では無理だ。

その後、投稿はしなかったが、エッセイを書き溜めて二〇〇五年に『傾聴ボランティア・逝きし猫を探しもとめて』を自费出版した。「アサヒタウンズ」に送ると、表紙の絵と書評を掲載してくれた。インターネットで検索すると現在でも出てくる。

二〇〇七年の「読者通信」に感動する文章が載った。「ひろば」は「読者通信」に変わり、スペースも半分になっていた。

「投稿者の猫友だちの猫が行方不明になり、何日か経って猫は傷ついて帰ってきた。傷にはあきらかに医者の治療のあとがあったので、近所の動物病院に問い合わせ、世話をしてくれたひととめぐり合った」というのだ。

私はすぐ「アサヒタウンズ」に電話をして、私の著書を贈りたいと申し出た。投稿者の住所は教えないことになっているので、立川駅でタウンズのひとつと待ち合わせて本を渡すことにした。改札口でそれらしい女性を見

つけ、「アサヒタウンズ」を見せると、女性はにっこり頷いた。一目で分かったのだ。私は二冊目の著書『傾聴猫又日記』も贈った。

しばらくすると、投稿者から礼状がきた。

副題の、逝きし猫を……が嫌だったので読まなかったのだが、終わりをちよつと読んだら、哀しくて一番読みたくない場面が出てきてしまった。それでも最初から読んだということだった。絵の上手な女性で猫の絵が描いてあった。迷惑だったのかなと心配した。

今年一月、『猫又ハイジは裁判員』を出版したことを知らせると、すぐに、本屋さんに注文するという返事がきた。うれしかった。一度会って話してみたい。

このような絆をつくってくれた「アサヒタウンズ」が廃刊になるのは残念だ。が、「紙の新聞」から「ネット・電子版」への時代の流れに、新聞社は赤字経営になっているらしい。

## アクエリアス——水瓶座の時代

吉沢 智子

三月に入って間もないころ、車のラジオから「アクエリアス（水瓶座）」という曲が流れた。この曲は今から四十年前も前にヒットし、この曲を歌っていたファイフス・デイメンシオンは、大阪万博のため来日した。

当時の私は、高校受験に向けての受験勉強中。大阪万博に向かって盛り上がる世間とは対象的に、なんとも気の晴れないうつうつとした日々を送っていた。そんな日々の心の友は、机の上のラジオだった。ラジオから「アクエリアス」が流れる度に、勉強の手を休めて聴き入った。英語の歌詞の意味などさっぱりわからないのだけれど、女性ヴォーカルのゴスペルのように太く心に響く歌声と、ソウルフルなコーラスに、受験勉強中の憂うつから一時開放されたような爽快感があった。

後で知ったことだが、水瓶座の時代とは、透きとおった愛と理解と光にあふれた世界のことだ、そういう時代がもうそこまで来ているよ、という意味のことが「アクエリアス」で歌われていたらしかった。

分裂と競争と対立の時代から、愛と理解と覚醒の時代へと希望のメッセージは、言葉の壁を乗り越えて、遠く日本の一中学生の心にもなんともいえない爽快感となって伝わってきたのだった。

## ガラスに魅せられて

吉沢 智子

子どものころから、なぜかガラスの類が好きだった。透明のガラスに赤や青や黄の色が少し入っているおはじきや、青から緑色まで少しずつ色味が違うビー玉、赤や黄色の羽根状のものが中に入っている透明なビー玉、平べったい丸い形のガラスでできた石けりの石など、手にとって見ているだけでうれしかった。おはじきやビー玉で近所の子たちと遊んではいたのだろうが、遊びよりもおはじきやビー玉そのものに心が引かれていたという記憶の方が強いようだ。

小学校五年生のころだったか、青緑色のビー玉を手にしたので、ためつすがめつながめていた時に、太陽の光でビー玉の中がボワツと明るく照らされたのが見えた。ビー玉の中があまりにきれいだだったので、思わずそのビー玉を目に近づけて中を見た。小さな水泡がいくつも見えた。まるで海の中を見ているようだった。青緑色のビー玉を通して見る世界は、あたりをすべて海の色に変えていた。一瞬まわりの音すら聞こえなくなり、本当の海の中にいるような不思議な感覚に引き込まれた。それからときおり、ビー玉の中をのぞくことで、自分だけの静かな楽しいファンタジックな時を過ごしていた。

やはり小学五年生くらいの時だったか、国語の教科書に、アルプスかどこかの山の子がいつも夕陽に映えて金色に輝く友人の家の窓に魅せられていたのだが、ある日、その友人宅を訪ねて自分の家の窓を見ると、自分の家の窓が夕陽に照らされて黄金色に輝いていたというお話が載っていた。そのお話を読んで、私の家の窓ガラスも夕陽に照らされて黄金色に輝くんだと思ったら、なんだかうれしくなった。そして夕陽は、もちろん私の家だけではなく、だれの家の窓も金色に輝かせるんだと思ったら、もつと

れしくなった。今でも時々、夕陽に映える窓ガラスを見ると、その時のうれしさがふつとよみがえってくる。

やはり国語の教科書の中に、正倉院のるり腕のことが載っていた。内容についてはまったくおぼえていないのだが、るり腕の写真だけは心に深く刻まれてしまったようで、いつかは見てみたいと思うようになった。悲しいかな、正倉院展にはまだ行くことができないでいるのだが、今から十三年くらい前にオリエント博物館に行ったおり、ガラス製の水さしの隣に置かれていたのは、るり腕とほぼ同型と思われる淡いこはく色のカットグラスだった。まさかここで見られるとは思っていなかったあこがれのるり腕に、どうしたことか涙が止まらない。まわりに人もいるし、そんなに泣いて、一緒にいた友人も一体何が起きたかと心配するだろうから、いかげん泣くのをやめようと思うのだが、感情の波は押しとどめることができず、自分でも困惑するのだがどうにもならなかった。

どうしてこれほどまでガラスに心引かれるのか、自分でもよくわからぬ。心は引かれるのだが、今まで種々の事情があつてガラスの世界にのめり込んだり、夢中になることはできないでできてしまった。たぶんこれからのめり込むようなことはないと思うのだけれど、もし少しでも余裕ができたなら、ガラスにふれるようなこと——例えば、グラスやガラス皿に電動のダイヤモンド針で表面を削って、図案化された草花や装飾的な模様を描いていくグラスリツツェンのようなことをやってみたいと、最近思うようになった。実際にできるのは、まだまだ遙か先のことのように感じられるのだが。

## 緑

吉田 緑

「緑」、生まれてから今日まで共にしてきた私の名前だ。小学生の頃、一年の児童は八十数人と少なく、半数が女子として、「みどり」が三人いた。私の「緑」は、硬い感じがするので好きではなかった。

自分の名前を説明する時、いやいやながら「色の緑」と表現してきた。外国人に、「私の名前は、緑。緑は緑色のことです」と言うと分かりやすいらしい。そして緑色が新緑や若葉のさわやかな、いい印象を与えることを知った。「いい名前だ。」と言われて、お世辞好きな外国人のほめ言葉かとも思っていたが、いろいろな国の人に言われるようになって納得するようになった。

名前の流行も変わってきた。最近の子どもの名前は漫画の登場人物のような、芸名と思われるような、変わった名前が多い。「みどり」も古風な名前になったみたいだ。

韓国人の友人に聞いた話によると、韓国では、陰陽五行による色を大切に生活に取り入れているそうだ。緑色は、誠実、素直、感情を抑える、リフレッシュなど、良いイメージがあるようだ。山や森の中で緑を見て癒され、深呼吸すると気持ちが良いことでも納得できる。食べ物も緑、赤、黄、白、黒と、色を意識して料理することで、バランスよくなるそうだ。韓国料理を思いうかべるとなるほどと思う。

私も、「緑」という名前のほうが、実際より可愛く思えるような年齢となり、だんだん愛しくなってきた。「緑婆ちゃん」と呼ばれるまで大切にしようと思うのである。

## 人生の最後に何を食べたいか

吉田 緑

有名人や作家の方々が、「人生の最後に何を食べたいか」という題目で書かれている文章をよく目にする。私は、衣食住のすべてに興味があるし、食べることは旅行と合わせて最高の楽しみだと思っている。成功を納めた有名人が、最後の晩餐というべき時に、どんなものを食べたいと思っているのか大変気になるし、参考になればと一生懸命文章を読む。必要なら、切り抜いて保存する。私の食についてのスクラップ記事の量は多いと思っている。

その内容は、有名人の方々の浮世離れした贅沢な食事の経験や、好みの食事内容や好きな食材、虫脛にしているお店などについて書かれている。しかし、人生の最後に食べたいものは、蕎麦か、ごはん味噌汁という方がほとんどである。以前私は、この選択が理解できなかった。若すぎたのだ。

三十歳過ぎると洋食はきつくなるとか、油物を好まなくなると一般的には言われている。私は、二十代の頃、毎日洋食でもいいと思っていたし、そう好みが変わることはないと思っていた。フランス料理、中華料理その他、洋食が一番だと思っていた。チーズやハム、ワインといった高価な輸入食料品を買うことも喜びだった。四十歳になる頃までそうだった。

ある日突然好みが変わったわけでは無いと思うが、多分結婚したことで外食が減ったことと、仕事をしなくなったことでストレスがなくなったせいもあるだろう。その後、畑をはじめたので野菜の収穫の喜びと、その活用に漬物や保存食を作り始めた。だし汁にこだわり、丁寧にとったかつおのだし汁に夢中になった。煮物や味噌汁が格段においしくなる。その頃から洋食を食べる機会が減って、野菜と魚ばかり食べている。

そのわりに痩せない。現在も、太ったままだ。夫も食べる事が好きで、築地市場などで買い物をする事を教えたのが間違いだった。市場に行きたがる夫に好きだけ買わせているので、冷凍庫まで別に買う始末。買う量も食べる量も多すぎる。市場の店の人は、私たちを商売していると思っ細かい領収書をくれるほどだ。

私は、最後の食事を、香港のペニンシュラホテルで思っている。香港なら高齢になってもそう遠くないし、あのホテルならいやな思いをしないで過ごせそう。そして心ゆくまで中華料理を食べて、紹興酒を飲む。中華のデザートも好きだけ食べる。部屋に戻り、夜景を見ながら香り高いジャスミン茶を飲む。ソファーにもたれかかり、気持ちよくうたたねをしたつもりでそのまま……それが最後になれば幸せだと思っている。

しかし海外で最後を迎えたら、自分はよくても大変迷惑をかけるだろう。そこで私は考えた。もうこれが最後だろうと判断したら香港に行つて楽しんで、日本に帰つてきて最後にならないかと。それなら最後の食事は、帰国して直ぐ食べたくなるもの、焚きたてのご飯と豆腐の味噌汁、漬物になるだろう。どんなに贅沢しても、白いごはんに勝るものはないと現在の私は考えているが、もう少し年齢を重ねると変わるかもしれない。香港なんていやだ、日本の静かな温泉で最後をと思ふかもしれないが、最後は、ごはんと味噌汁を希望するだろう。



# 小説創作講座

作家・淑徳大学国際コミュニケーション学部講師 川又千秋

## 【三百字小説作品選】

■『人類の神秘』 武藤多恵

「地球の先住人は、へそで茶を沸かしました」

考古学者が語ると、講演会の参加者達は感嘆の声をあげた。スクリーンに『玉露』というお茶が映し出される。

「人肌の温度で淹れたそうです。こんな時へそを使ったのでしょうか」

「先生、へそとは？」

質問を受け、考古学者は人体の写真を映し出す。

「体の中心にあった、温度調節するための穴です」

「人類の神秘ですね」

初老の紳士の姿をしたアンドロイドが、鋼の身体を乗り出した。

「本当に。天災と少子化で絶滅してしまったのが残念です。次は豚という、おだてると木に登った動物の話です」

絶滅してしまっただけで検証する余地がない。アンドロイド達は、地球人の摩訶不思議なエピソードに聞き入った。

■『宝物拝観』 平井浩幸

客先での打合せを終え、会社に戻らずに帰宅する途中、入口に『宝物拝観 無料』と書かれた建物があった。

ほんの好奇心から門をくぐり、案内に従うと、仏像がズラリと並んだ部屋に通された。

ひとつめは、三面六臂の姿で有名な『阿修羅像』だった。そこでふと、今日の打合せの事を思い出した。

（我侷な客、知らん顔の部長、居睡りする部下。四面ならぬ『三面楚歌』だ）  
「フッフ」

阿修羅像から笑い声が漏れた気がした。

——まさか、と思った直後、「次はワシで上手い事言うてみよ」

え？ と顔を向けると、隣の仏像が期待に満ちた視線を私に送っていた。いや、さらにその隣からも……

しばらく、この建物から出られそうにない。

■『いますよ』 渡辺幸子

「救いの神はいないのか」が彼の口癖だった。

なにしろ滅法ついていない。

牡蠣を食べに行けば、友人は無事で自分だけあたった。

不振だった会社に見切りをつけて転職すれば、残った同期が彼の穴を埋めて業績回復。

軽く付き合っただけで別れた元カノを後輩に紹介してやったら、後に資産家の娘だったと判明、結局逆玉。

「俺ばっかり損してんだよ」

久しぶりに会う友人に愚痴を言いながら歩いていると、宝くじ売り場が目に入る。

「スクラッチでも買ってみるか。あれ、小銭入れが見当たらないな。先にどうぞ」

「そうか？——わ、十万円当たった！」

「……やっぱり救いの神なんていないんだ」

嘆く彼は気づいていなかった。実は彼自身が神であることに……

### ■『誠意』 除村美代子

「猫田さん、借りたモンはきちんと返そうや」

男は、座卓の前にどかかと腰を下ろした。座卓の下で寛いでいた猫が驚いて、次々と飛び出る。

男の言うことはもつともだ。だが、この男の執拗な取り立てで、どれだけ多くの人が命を絶ったことか。

茶を差し出す私の手は震えた。

「あんたがいなくなったら、この猫たちも困るだろう。そろそろ誠意を見せてもらわにゃ」

薄ら笑いを浮かべて、男は茶を一気に飲み干した。

その途端、男は顔を歪め、全身を震わせ、やがて猫に姿を変えた。そして、何かを訴えるように、か細い声で鳴いた。

よしよし、心配するな、お前の面倒も最後まで見てやる。それが、私の、せめてもの誠意ってヤツさ。

### ■『電車』 永宮貴子

電車の中ではキョロキョロするのが好きだ。

時々、カッコイイ人を見付けると、じっと見つめてしまうから、隣にいる彼女に睨まれたりする。

もちろん、私の隣にも彼氏がいる。

「何で、そんなにキョロキョロするの？」と聞かれたりするので、「ううん、何となく面白い広告でもないかと思つて……」とか、誤魔化している。

そして、そんな何気ないやり取りが幸せだったりする。

「ねえ、そこのお姉さん、誰と喋ってるんだ？」

時には、酔っ払ったおじさんに絡まれたりするけど、ね。

### ■『樹上の怪』 田中正二

「昼食でも一緒にどうだい？」

頭の上で声がした。

馬上から見上げると大きな樹の枝に案山子がぶら下がっている。

「驚いたかい？ 鳥よけに吊されたんだが、いつの間にか喋れるようになったのさ。今じゃ気味悪がられて、すっかり化け物扱いだ。麓の村で噂を聞いたろう？」

「ああ、そんな話をしていたな」

「その噂のせいで暇を持て余している。一休みして昼食でもどうだい？ こから先は長いぜ」

空腹だった俺が承知して樹を登ろうとすると、足が滑り、ちょうどそこに垂れ下がっていたロープで首を吊りそうになった。

間一髪で地上に降り立った俺が、案山子に向けて矢を射かけると、不気味な笑い声が響いて大鳥が飛び立った。

(東京新聞サンデー版《300文字小説》10/5/30掲載)

### ■『化かし合い』 武藤多恵

今日は楽しみにしていた婚活パーティ。ワクワクしながら女性の前に座

る。

「ハロー、ジョニー・デップです」

「きゃあ、嬉しい」

人間はこういう時、ネコを被るだろ？ 俺達タヌキは化けの皮を被るの  
よ。

「私もあなたの理想の女性に化けるわ。ほら、ヴァネッサ・パラディ」

「ウォー！ すごいや」

すると、ここで司会者の声。

「ご歓談中ではありますが時間がです。男性は右隣の席にずれてください」

「次はマット・デイモンでいこう」

「こんにちはマット。ちょっと尻尾が出てるわよ」

やれやれ、化かし合いに忙しくてあつという間にパーティーは終わってしま  
い、結婚相手なんて見つかりやしない。

人間の婚活パーティーも、似たようなものじゃないのかい？

■『フルドレカンレンドレーチェという名前の店』 田波晴佐

その店では裏メニューとして究極の食材「フルドン」が提供されると言う。

噂では「フルドン」は食者の舌の下から潜りこんできて快樂神経を刺激  
しつつ食者の脳を食べてしまうらしい。食者は当然死んでしまうがその死  
と引き換えに味わう快樂は至上のものだという。

噂はグルメと呼ばれる人々の間を駆け巡り、幾多の人々がその店を探し  
回った。私もその一人だ。死など恐れようか？

「ところで、この食材は私の死後、どうなるのかね？」

「店で回収いたします」

「それにしても長い店名だね。どういう意味なんだい？」

「フルドン神に仕える者と言う意味です」

ウェイターは少し笑って付け加えた。

「食材と申されましたが、貴方様の方が食材ですよ。」

■『ヒーローズ』 平井浩幸

「あんなお節介野郎のドコがいいんだ？」

ヒトミは黙ってタケシの話を聞いていた。

「俺の所に戻って来い。な、また一緒に——」

そこへ突然、赤い全身タイトのヒーロー、ソウダンレッドが現れた。

「トラブルかい？ さあ私に相談しなさい！」

——どこか気まずい沈黙が漂う中、ピピッと電子音が響く。

「ちつ、また怪人かよ！」

そう吐き捨てたタケシは、パッと赤い衣装のヒーローに変身し、「今の話、

考えといて」と言い残してバイクで走り去った。

「タケシ、ごめん。もう戦闘はイヤなの……」

そう呟いた後、ヒトミはレッドの腕をとった。

「さ、行きましょう」

「ん？ 君だったのか、ソウダンピンク。変身してないと気付かないモンだ  
な、ははっ」

■『プレゼント』 渡辺幸子

中学二年生の娘が、突然夫にストラップを買ってきた。最近口もきかな  
くなっていたのに、珍しいこともあるものだ。

「携帯につけてね」

娘に言われた通りにする夫の顔は、だらしなくにやけ切っていた。

翌日――

「あれ？ あの子は？」

「さっきまでいたんだけど。部屋で勉強じゃない？」

私が言うと、夫は買ってきたケーキの箱を残念そうに見下ろした。ちりと鈴の音が重なる。

出所は、胸ポケットにしまわれた携帯のストラップ。夫は、ほぼ一日中携帯をそこに入れて持ち歩く。

なるほど。さっきまで雑誌を読んでいた娘が突然立ち上がって自分の部屋に消えたのは、その音を聞きつけたからか。

娘は、父親の首に鈴をつけたのだ。

#### ■『うっかり』 川又千秋

シャワーを浴びた彼が、「じゃ、また」と、そそくさ、妻の待つ家庭へ帰っていた。部屋に残されたのは、私独り。

すると、今までどこかに隠れていたシャム猫のミイが、ふらりと姿を現し、私の膝に飛び乗って丸くなった。すぐ寝息を立てはじめる。

「おまえは、いいねえ。なんの悩みもなくて……」

指で腹の毛をくすぐってやると、気持ちよさそうにグルグル喉を鳴らす。そして、呟いた。

「……ったく……ドラマの愛人気取りで、いい気なもんだ……」

「え？ なに……」

驚いて指先に力をこめたら、ミイは身じろぎひとつして目をうつすら開いた。

そして、照れ笑いに似た欠伸の後、わざとらしい甘え声で、「ミイイー」

と小さく鳴いた。

#### ■『撞木鮫の言葉』 永宮貴子

ある日、人間の言葉を話す撞木鮫と出会った。その撞木鮫は気軽に話しかけてきた。

「この辺の海には魚が沢山いるので、いつも大漁なんですよ！」

僕は混乱したが、あまりに親しげに話しかけてくるので、しばらく様子を見ることにした。

「あのう、聞いていますか？」と言いながら、僕に体を軽くぶつけてきたので、ビックリしたが、何とか「ええ、聞いていますよ」と答えた。

すると突然「僕、魔法が使えるんですよ！」と言い出した。

あまりに突拍子の無い話に驚いたが、「出会った記念に一つだけ願いを叶えてあげますよ！ 何か無いですか？」と言うので、試しに「じゃあ、僕を人間にしてください」とお願いしてみた。

#### ■『家庭内暴力』 渡辺幸子

昨日、リビングで母親を蹴った。

それを父親に話すもんだから、また蹴ってやった。

さっき庭先で掃除するとき思い切り蹴飛ばしたら、ちょうどやって来たババアにまで言いつけやがった。蹴られた腹をさすりながら。

「また蹴られちゃいました、お義母さん」

「ほんとに元気な赤ちゃんね。早く会いたいわ」

■『見誤り』 除村 美代子

街中を歩いていて、道行く人の視線を感じることはありませんか？

そんなときは「知り合いにでも似ているんだろうな」とか、「もしかして芸能人の誰か？」なんて思いますよね。

ところが、このところ、どうも変なんです。見られるというよりも凝視、驚きの表情も明らかに恐怖に歪んでいます。

「失礼な」と思いつつ鏡で顔を覗いても、特に変わったところはありません。

ある日のこと、いつものように歩いていると、向こうから人が来ます。

驚かれるのも嫌だったので、私は俯きました。そして、ようやく私は、皆が驚く理由がわかりました。

私の影には、頭と体を繋いでるはずの首がなかったのです。

■『コンタクト』 平井浩幸

後輩を家に招いた日のこと、会話の途中で彼の奥さんが不意に席を外した。

コンタクトの調子がどうか言っていたのを思い出した私は、目玉が外れたのかな、と冗談めかして言った。実は、私の妻がコンタクトのことを面白半分にそう呼ぶので、つい口を滑らせたのだ。

ところが、彼はその言葉にひどく驚いた顔をした。

私は「気に障ったのかと思ってひとまず謝り、事情を説明しようとしたが、彼は遮るように歓喜の声をあげた。

「まさか、こんな身近にお仲間がいたなんて！」

コンタクトの呼び方くらいで大袈裟なと思った瞬間、彼は本当に目玉を取り外し、その奥の鈍く黒光りする大きな瞳で私を見つめた。

「で、先輩はどちらの星からいらしたんですか？」

■『悲しい事しかかけない鉛筆』 田中正二

悲しい事しかかけない鉛筆を持っていた。毎日毎日悲しいことばかりを書いていた。

仕事の事。家族の事。自分の事。そしてあの人の事。

悲しい事はいつもある。書くことは尽きない。でもこの鉛筆を使い切った時、何かいい事があるんじゃないか。なんとなくそう思っていた。

それから毎日毎日、悲しい事を書き続けた。

ある時、鉛筆が全然減らない事に気がついた。悲しい事をいくら書いても、書いても書いても減らないのだ。

そして気がついた。いくら書いても悲しい事は無くならないと。

そう思うと少女は立ち上がって一〇年ぶりに部屋を出た。

■『春は自転車に乗って』 武藤多恵

土曜の朝、目覚めたら晴天。昨日までの寒さが嘘のよう。春だ！ 私はサイクリングに出かけた。

平日の朝は大急ぎ、夜はくたくたで、自転車を楽しむ余裕はない。でも、今日は違う。

「気分爽快！ このまま、どこまでも…」と呟いた瞬間、ママチャリのチェーンがギューンと音を立て、ペダルが勝手に勢いよく回転をはじめた。

そうか！ 自転車も、こんな風に気分良く走りたかったんだ。気づいた途端、フワッと身体が浮いた。あれよあれよという間に景色が後ろへ流れ去る。

「よーし！ 今日は思い切り走らせてあげる」



声をかけると、自転車は、嬉しそうに、ポン！と飛び跳ねた。  
(東京新聞サンデー版《300文字小説》・平成22年4月18日掲載)

■『嵐の朝』 除村美代子

「ああっ、やっぱり電車来てる！」

台風が接近していると伝えられた朝、心配していた通り、ダイヤが乱れて遅れて到着した電車が、いつも乗車する時間より少し早く駅を出ようとしていた。

私は慌てて階段を駆け下り、閉まりかけた乗車口に体を滑り込ませた。

「あっ」

乗る寸前、一瞬誰かに腕を引っ張られたような気がした。

誰？ 閉まる扉越しにホームを見渡したけれど、見えたのは駅員の姿だけだった。

「おかしいなあ。でもまあ、とにかく間に合って良かった」

ほっとして、私は車内の方へ振り返ったが、そこに人一人いないのを見て、声を失った。

そんな私を嘲笑うように、スピードに乗った回送電車は、隣の駅を軽やかに通り過ぎた。

■『枕』 武藤多恵

明け方、息苦しさに目が醒めた。何かが顔の上に載っている。重い。それに汗臭い。

どかそうと手で掴んだ瞬間、耳元で声があった。

「オレはお前の枕だ。二十年も重くて臭い頭に敷かれてきた。オレの気持ち

が分かったか」

気味が悪い。俺は力任せに枕を引き剥がし、部屋の隅に投げ捨てた。

そして朝、ゴミ袋に入れて捨ててしまった。

その日の会社帰り、新しい枕を買った。

今日は安眠するぞとベッドに入り、新しい枕に頭を載せる。

その瞬間、俺は重要なことを思い出した。

枕が変わると眠れない性質だから、二十年も同じものを使い続けてきたことを。

やがて一睡もできずに夜が明ける頃、どこからともなく、捨てた枕の高笑いが聞こえてきた。

(東京新聞サンデー版《300文字小説》09/12/27掲載)

■『近頃の若いモン』 川又千秋

まったく、近頃の若いモンは情けない。

なんでもかんでも怠けよう、手を抜こう、それしか考えておらん。「楽するためなら、どんな苦勞も厭わない」ってヤツだ。

ワシらの若い時分は、苦勞こそが生き甲斐だった。身体ひとつ、素手と勇気で獲物と戦ったもんだ。

それが、どうだ！ あいつらときたら、暇さえあれば、楽するための工夫に血道を上げておる。

石斧や棍棒なら、まだ許せる。しかし、槍だの、飛び道具に至っては、もう話にならん。

得物にばかり頼るから、見ろ！ 若いモンの体格は、どんどん貧弱になっておる。

こんなことを続けていたら、一族は衰退し、いつか滅びるぞ。

ああ、なんたることだ……とボヤキながら、旧人類は絶滅した。

# 絵本をつくらう！

講師 詩人 木坂 涼

## 私と絵本

あさです。とても いいてんきです。  
でも、クマネズミは  
カーテンもあけずに、へやのなかで  
ぼんやり していました。  
おきたくもなければ、  
ねむっていただくもありません。  
きょうもまた、「パジャまんま」  
になりそうでした。

## 消極性という積極性？

木坂 涼

「絶対、家を出る」と半ば強引に家を出たのが大学入学時。その十年後、  
今度はガラリと、少々ひきこもりがちに両親の家でふたたび暮らしていた  
ときのこと。ある日、一通の手紙をもらいました。

「自分の書いた詩に、絵とか写真をつけて出品しませんか」というお誘い

でした。小さなギャラリーで展示するというその会場へ直接出向かなくても、作品を送ればあとはお任せ、という手軽さもあって、私は参加しました。詩は、高校生のころからちょこちょこ書いていましたので。

そしてこれが、私が絵本の世界に入る大きなきっかけとなったのです。

ギャラリーでの会期が終わる頃だったか、福音館書店の編集部の方から連絡をいただきました。

「絵本の文を書いてみませんか」と。ギャラリーの展示品を見て下さったのです。

さらにその数ヶ月後、今度は別の出版社さんから、「絵本の翻訳をしてみませんか」と声をかけてもらいました。その前年に、私は近所の印刷所をお願いして、「カレンダーのはなし」というカレンダーを作っていました。出来上がったそのカレンダーを数人の知り合いに送ったところ、ちょうどそのころ転職していた詩の仲間がこれに目をとめ、話を聞けば、「カレンダー」も声がけのきっかけになったようでした。（「カレンダーのはなし」はのちに、山口マオさんの絵で本になりました。詩の仲間だったのが高橋啓介氏。今はセーラー出版の社長さんです。）

この双方からの嬉しい連絡を受けたとき、私は三十五歳。再就職先を本気で探すでもなく、結婚するでもなく（その後結婚しましたが）、そのくせこの先自分はどうなるのかと不安は一人前で、そのわりにボンヤリ、という「混合体」状態でした。

その後、「創作絵本や翻訳絵本を見ました」といって、また別の編集者さんから連絡をいただき、今に至っています。

『ともだちからともだちへ』という絵本の導入部は、なにをするでもなく、毎日を「つままないな」と思っているクマネズミの部屋着のシーンから始まります。私もこのクマネズミと似た日々を送っていました。でもクマネズミはその後、変わります。私も変わりました。（でもやっぱり私はとき

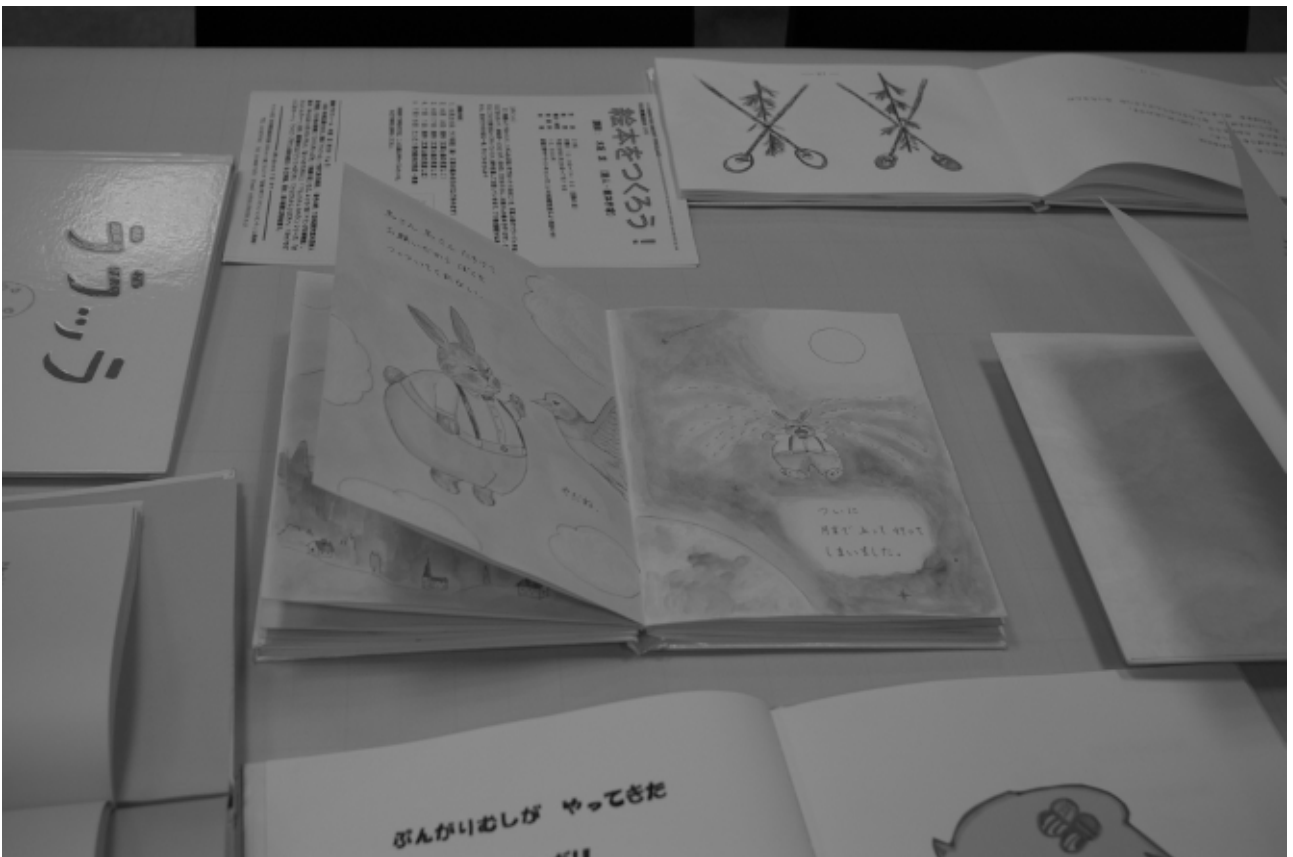
どき「バジャまんま」です・・・。」

積極的に生きることが自分のテンポに合っている人は、特別自分が積極的にしている意識はないのかもしれませんが。そう思ったとき、私のテンポってどんなだろうと考え、「消極性という積極性？」という言葉が思い浮かびました。引っこんでいても、出品したりする。引っこんでいても、作ってみたいものは作ってみる。

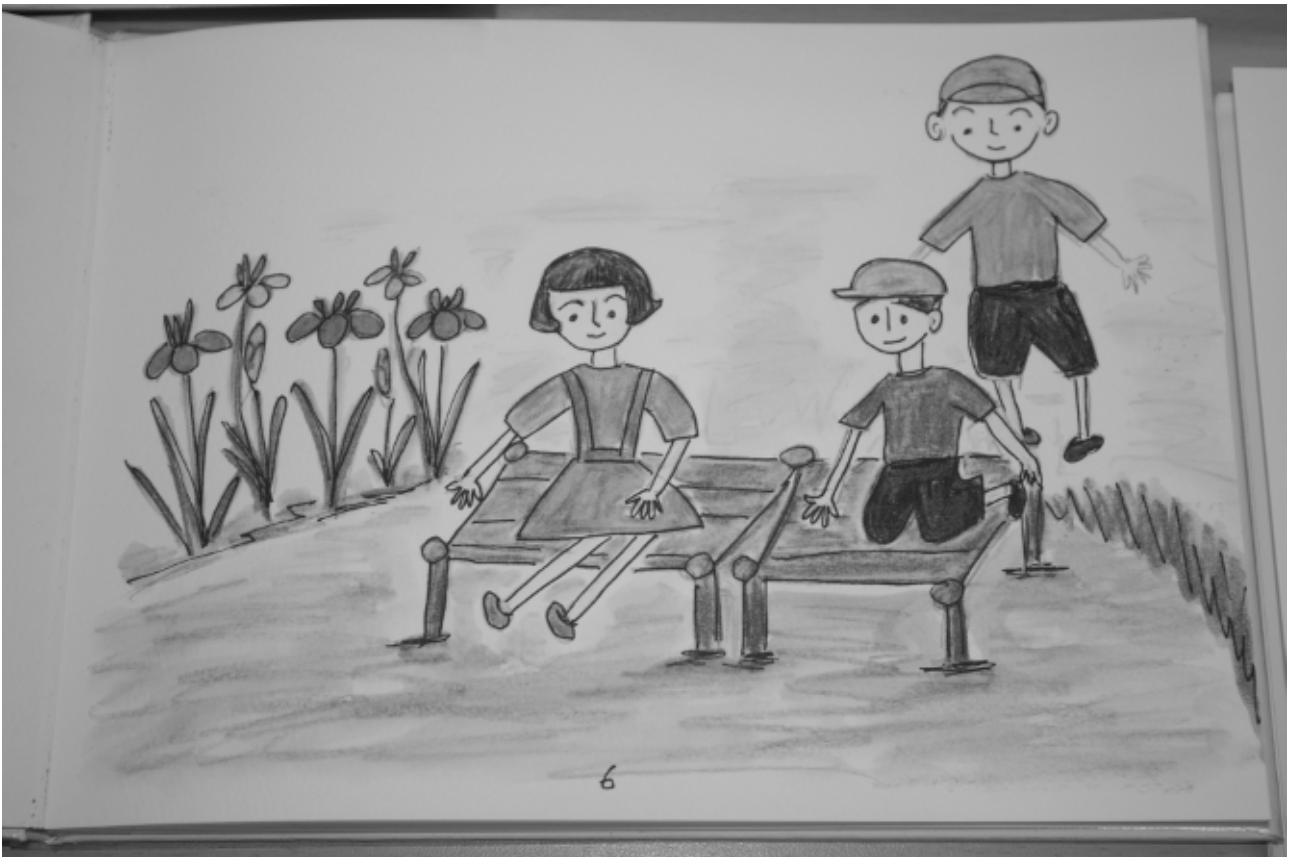
仕事として「絵本」の世界にかかわると、「仕事を通して」私はまた少しずつ変わってきたと思います。これからも新しいところへ出て行きたいし、新しいところを引っこんでは開拓したく思っています。

〔絵本通信〕2010冬季号掲載エッセイ





明石 芙三代  
高塚 和子  
藤原 かよ



岡田 照子

## 特別寄稿

豊島新聞に掲載された原稿です。

### △立春から暮春の部▽

#### 春とタンポポ

阿部啓子

立春を過ぎ冷たい風の中でも春の気配が感じられるようになりました。寒々しく葉を落としていた木々の新芽が膨らみ始め、動物たちは冬眠から覚めます。春は「もの」みな動き始めるエネルギーあふれた季節と言えるでしょう。

やがて冬の間は葉を小さくしていたタンポポが春を告げます。ライオンの歯を想像させるそのギザギザな葉からダンディライオンとも言われ、空に向かって咲く花は元気の象徴です。黄色は身体を活性化させる力を持っているともいわれていますが、関西以西では白花タンポポが多いそうです。見て楽しむだけではなく、葉や花、根は健胃やデトックスとして頼りがいのある春のハーブ（葉草）です。芽吹き季節は私達の体内にも変化を与え、いろいろな病気が出やすい時期でもあります。タンポポの若芽をサラダや花と一緒にさつと茹でて水にさらし、十分にアクを抜いて、お浸しにして食べてみましょう。乾燥した根をよく炒って煮出したノンカフェインのタンポポコーヒーを飲んでみましょう。そのほろ苦さは体内環境を「冬」から「春」へと変えてくれることでしょう。

さあタンポポを探して春の風に吹かれてみませんか・・・

（淑徳大学公開講座「ハーブのある暮らし」講師）

### チベット自治区がゆれている

伊藤堯貴

新年度が始まった。入学、入社などにより、新たな人と出会う時期である。ぼくは今から20年ほど前に西巣鴨にある大正大学に入学した。これが、千葉県の九十九里の地に生まれたぼくが、豊島区と関わりをもった最初である。大正大学は真言宗智山派、真言宗豊山派、天台宗、浄土宗の三宗四派が母体となって経営されている大学である。

大学に入学してから四年後、私は仏教をさらに学ぼうと大正大学の大学院に進んだ。そこで、僕はさまざまなすぐれた先生や先輩と出会うことができた。

その先輩の中には、チベットから留学してきた二人のチベット僧がいた。彼らは純朴で高貴な精神の持ち主であった。ぼくらは彼らと出会うことにより、幸運にもチベット語やチベット仏教について触れ、学ぶことができた。彼らはチベットから来たのではない。1959年、チベット動乱により、チベットの指導者であるダライ・ラマは、インドのダラムサラに逃れて亡命政府をおこした。ぼくの先輩の二人のチベット僧も、このダラムサラからやってきたのだ。

現在、チベット自治区がゆれている。ダライ・ラマは、チベット自治区の領土的独立を主張しているわけではない。また北京オリンピックの開催にも賛成している。かれはチベット仏教を根幹とするチベット文化の尊重、文化的独立を主張しているのである。またダライ・ラマは仏教の精神による非暴力による運動を訴える。願わくはチベットに平和が訪れんことを。

（大正大学講師・淑徳大学公開講座「密教」講師）

## 緩やかな時間

牛山ゆう子

昼の空に仄かな月が浮かんでいる。落葉した街路樹の、織く無数に伸びている梢の上の青空。バスが来るのを待ちながら、心が少しふわりと月に寄る。

今年元旦から穏やかに晴れて、陽光にも予祝が添っているような、明るい平和な良い年になってほしいという願いが、穏やかな光に宥められているような、険しい世情の思われる年頭だった。一日一日が過ぎるのは何と早いことかと、毎年のように思うけれど、正月の華やきも瞬く間に過ぎ、七草の頃にはまた気忙しい日常になっている。鏡開きや小正月と、春を迎える喜びは、日常の中にもっと緩やかな時間を求めているのかもしれない。

山ふかみ春とも知らぬ松の戸にたえだえかかる雪の玉水

式子内親王

岩間とぢし氷も今朝はとけそめて苔の下水みちもとむらむ

西行

遙か昔の春。ゆったりと過ぎて行く時間の中に、雪解けの雫や水音が、何と生き生きと響いていることだろう。古典は乾いて拉げそうな感情をも優しく潤してくれる。

のんびりと夫とさしで飲む酒にたぐふ菜なり白き豆腐は

本当に豆腐が好きとも思はねど豆腐には夕べの母のこゑあり

馬場あき子

『太鼓の空間』より。もつとも多忙な方のおひとりである馬場あき子氏。ほのぼのとした温もりと、抒情の豊かさが思われる。

(歌人・淑徳大学公開講座「短歌」講師)

## 春の雪

岡本勝人

大正生まれの父は、東京にふる春の雪は台湾坊主のせいだと、生前よくいつていた。

昨日から今日にかけて、東京でも四センチは積もるとの予報である。朝起きて、カモミールをすこし濃い目にいれるが、まだ雪はふってはこない。歌川広重の版画で、赤い大門と提燈ごしに見える、雪の浅草寺が思い出される。

気象庁は、危機管理のためだろうか、すこし大袈裟に予報をだす。曇り空にもかかわらず、昼になっても、雪はおちてこなかった。それとも、日本列島の南の海上からおくられてやってくるのだろうか。

夕方になり、デュファイの絵のある街のレストランにでかけた。桜海老とトマトのパスタを注文する。雪のふるのをまちながら、わずかではあるが、想いのふかい時間である。浅草や桜田門にふった江戸の雪も、二・二六事件の日につった帝都の雪も、父がいったように、台湾坊主のせいだったのだろう。

前回の雪では、都内で二百人以上がすべってけがをした。久しぶりの休日だったが、雪のために遠くにでかけることができない。夜になって、ようやく台湾坊主が雪をつれてあいさつにきた。

(淑徳大学エクステンションセンター)



## 春のティーカップ

小澤千恵

今年も桜の季節がやってきた。桜の花見の風習は平安時代の宮中で始まったといわれている。

源氏物語の「花宴」には、御所での桜会の様子が書かれている。宴に招かれた源氏が、夜桜と朧月夜の美しさに感動していたところ、ある女性とすれ違い扇を交換する。この女性の扇の色目が、紅の上に白を重ね、地の紅色が透けて桜色に見えるという「桜がさね」だったことに源氏は感動し、持ち主である女性に惹かれていく。夜桜も、朧月夜も、「桜がさね」の色合わせも、淡くやわらかな印象の色彩であり、四季の移ろいを歌に詠んで楽しむ日本人ならではの繊細な感性が見出した和の美といえよう。

同じように日本人ならではの感性が生み出した、大倉陶園の「岡染め」という技法を使ったティーカップ、「左近の桜」をご存知だろうか。高温で焼成した生地に、日本人が古くから和食器で慣れ親しんできた色、染付を思わせる顔料で桜を描き再度焼成すると、顔料が釉に沈み、白く滑らかな生地に淡くやさしいブルーの桜があらわれる。

海外の陶磁器メーカーにはない、繊細で美しい色合いのこのティーカップには、やさしい味わいの和紅茶を淹れて、夜桜を眺めたいものだ。

(淑徳大学公開講座「ティー講座」講師)

## 21世紀を担うリーダー養成講座

織田善行

淑徳大学エクステンションセンターでは、アドベンチャー・コーチングと提携し、一昨年から社会人対象の「リーダー養成講座」を開催しています。日本を代表する講師陣が担当し、期間は4月から9月の6ヶ月間。原則として隔週土曜日に3講座を学ぶというハードなスケジュールをこなしていきます。その間合宿を2回実施し、ゼミ形式で受講生間の討議を大切に、最後には派遣企業の経営者の前で発表することになっています。

プログラムは、以下のように3つのステージから構成されています。

1. 第一部…「自分の座標軸をつくる」。日頃忙しくして自分と向き合うことが少ないビジネスマンが、しっかりと自分の生き方を考える、というステージ。

2. 第二部…「企業経営とリーダーシップ」について、いろいろなリーダーから話を聞き、自分なりのリーダーシップスタイルをつくる、というステージ。

3. 第三部「世界と日本、日本の課題」について、環境問題、少子高齢化、CSRおよび世界との交流など、グローバルな視点で考えるステージ。来期もほぼ同じスケジュールで開催予定しています。豊島区内の企業からの派遣を期待しています。

(アドベンチャー・コーチング(株)代表取締役社長)

さくら、さくら

神尾和由

もう随分前のことです。友人と彼の馴染みの店で話した折、彼が「願わくば花の下にて・・・」と始めました。僕は「そのきさらぎの望月のころ」と思い出しながら続けました。彼は毎年、千鳥が淵で夜桜見物をしているようでした。

そして三年前の三月には、僕は警察病院に手術入院していました。外出許可が出ましたからと看護師さんに勧められ、飯田橋から市ヶ谷まで外濠公園の桜堤をゆっくり歩きました。公園は新見附橋で一旦途切れ、すぐまた続きますが、公園の入口に東京市外濠公園と書いてありました。こういう物を見付けると嬉しくなります。何でもピカピカの新品にするのではなく、このように少し放っておいてもらえないかと思えます。二度目の外出は、同じ病室に入院中の御巡りさんから、千鳥ヶ淵の桜がきれいだと聞いて出掛けました。この人が警察学校に入った時、学校は今の武道館の位置にあり、田安門前の桜は今より背が高く、従ってそのトンネルも立派だったようです。確かに樹の上方は切られています。幹が空洞のものもあり、それぞれ治療を施してありました。桜切る馬鹿梅切らぬ馬鹿と聞いていましたので、その今日的桜守は素晴らしいと思いました。

春の日差しを浴び、ハラハラと散る満開の桜は、悲しさと明るさが溶け合っていました。

(画家・淑徳大学公開講座「鉛筆画・パステル画」講師)

手書き文字寸感

鈴木麗薫

日本人にとって春と桜は切り離すことのできない関係にあり、一千年以上の昔からそれは変わらない。

一千年前といえ、時は平安。王朝文化が花開きし頃である。その頃、貴族の師弟の必修教養の一つに手習いがあった。力のある貴族は字の上手な人に手本を書かせたし、能書家の手紙はそれが詫び状であっても大切にされた。

清少納言は枕草子の中で「手(字)よく書き、歌よく詠みて、ものごりごとにもまづ取り出でらるる、うらやまし。」と書いており、上手な字への憧憬がとても強いものであったことがよくわかる。

最近は大人の手書き文字に出会う機会が減った。回覧板、子供が持つてくる学校からのプリント、看板、ポスター、手紙・・・かつて大人が書いていた生活の中の文字は活字に置き換えられることが多くなった。心を込めて真剣に書いた大人の文字の激減は、子供達にとっては不幸の一つである。子供達は、美しい大人の文字、個性豊かな大人の文字に直接触れることによって、自然と文字の成長を促されていたからだ。

とはいえ、パソコンも携帯のメールも大変便利。入学、就職、転勤・・・春は節目の季節でもある。さて、我々大人は手書き文字との関係をいかに築こうか。

(書家・淑徳大学公開講座「かな書道」講師)

## 萌黄色の霞

永島直樹

寒い日が三日続くと、やや暖かい日が一日ある。そんな感じ。だが、春は確実に近づいている。丸裸をさらけ出していた近所の雑木林、よく見ると、木々が芽吹き始めている。椎の木、ケヤキ、コナラ、ブナ、などなど。

堅い芽の先がプツと開いて奇麗な萌黄色が見え始める頃、雑木林は霞がかかったようになる。淡い淡い萌黄色の霞。この光景にお目にかかれるのはごく短い期間だけだ。すぐに葉が大きくなり、緑が勝ってしまう。

この短い時期が好きだ。春の息吹……。

徳川家康が江戸を開いた頃、武蔵の国一面は沼と雑木林であったという。見渡す限りの雑木林が、萌黄色の霞に染められていたのだと想像すると、なんだかその霞に吸い込まれ溶け込んでいくような気がする。

そして彼岸がやってくる。彼岸と言えば、正岡子規は、母の言った言葉をそのまま作品にしたと前書きし、《毎年よ 彼岸の入りに 寒いのは》と詠んだ……。春の光に惑わされて、コートやセーターを片付けてしまうと後悔することになる。そこで花冷えの中を薄着で突っ張ってみるのだが……なあに、やせ我慢が似合う季節なのさ。と気取ってみるが、やっぱり寒い。

(演出家・淑徳大学公開講座「朗読講座」講師)

## 喜多見の古社の追儺神事

野田茂徳

旧暦では立春から新年が始まる。つまり「節分」は大晦日。ちなみにわがくにで新暦が使われ始められたのは明治六年一月一日。その前日は明治五年十二月二日であった。明治五年十二月は、一日と二日の二日間だけである。長い間、立春を新年とする習慣は、新暦を採用している東アジアや東南アジアの中国文化圏の国々や地域においても現在でも「正月」として華やかな祝祭が繰り広げられている。わがくにでも横浜・中華街では毎年チャイニーズ・ニュー・イヤーズ「春節」の祝祭がにぎやかに繰り広げられている。

今やわがくにでは旧正月の風習はすたれてしまったが、「大晦日」の行事であった「厄払い」「鬼追い」「豆まき」の行事は残っている。もともと中国から伝わった風習が、平安時代にはすでに宮中行事となっていた。それは宮中では舎人とねりが鬼に扮せられそれを殿上人らが「桃の弓」「葦の矢」「桃の杖」でもって追い討ちをかけるものであった。宮中行事としては江戸時代初期にすでにすたれてしまった「追儺ついな」がそれだ。その後、「追儺」は神事として民間で伝承されていた。

世田谷区喜多見の古社「氷川神社」では、世田谷区の「無形民俗文化財」になっている珍しい節分祭がとり行われている。祝詞奏上の後、社殿前で追儺ついなの豆まきが行われ、そこから「鬼問答」「大国舞」「恵比寿舞」の一連の古社に伝わる追儺ついな神事がくりひろげられるものだ。

(筑波大学名誉教授・淑徳大学大学院客員教授)

## 萌え出づるもの

森 高雲

二月生れのせい、毎年二月には、何故か悩む時期を経験する。古いものが終り、新しいものが生まれるための生命のカオスを感じるのである。それで、不安と希望が交錯する。

三月になると安心する。もう新しい時間が流れ始め、明るい光のなかで生きてゆける。梅が散り、桜が咲き、そのうち櫻が赤くけぶるように萌え出で、新しい大地の生命のいぶきを感じる。

こうした美しい季節のめぐりのなかで生き、書道続けてこれた幸せを、還暦を過ぎた今しみじみ思うようになった。

書道をやめることは、一本の苗木を育ててゆくのに似ている。

大学で書道を専門に勉強し書道の教員になったのに、書道の意味を見つけないことができず、自分の才能も信ずることができず、毎日熱心に練習していたものの、いつも書道をやめたいと思っていた二十代。

どんな樹も一年たてば、必ず年輪をきざみ、新しい枝葉が伸びるように、書道もやめないで続けていけば、一年ごとに新しい何かが分かり、見えないうちに見え、できなかつたことができるようになる。そのことを三十歳過ぎて自覚した。才能がなく不器用でも、書道は無限に伸びてゆく道である。

(書道家・淑徳大学公開講座「書論」講師)

## 地下鉄十三号線物語

星野英樹

副都心線と呼ばれる地下鉄13号線が今月、池袋と渋谷を結んだ。路線上の大きな百貨店は集客のために大規模な改築を行っており、池袋も例外でない。

新しい鉄道が敷かれると、人の流れも大きく変化する。距離的にはたいして離れていなくても、なぜか疎遠になっていた人と思いがけずに出会ったりするのも、新しい路線の敷設や乗り入れが原因だったりする。

大学卒業以来、久しく会っていなかったある人と再会したのも、開通した直後の有楽町新線の車両の中だった。いつの時代でもそうであろうが、学生時代、音楽や文学、映画が世界の中心であるかのように熱く語り合ったその人も、すっかり平穏な日常にとけ込んで幸せそうだった。

再会に感動し、上の空で近況を伝えながら、あの頃はいつもお気に入りバッグにレコードや画集を入れていたっけ、など思い返しているうち、降車駅に着いた。手にさげた買い物かごには晩ご飯の食材が入っていたに違いない。車両の中を振り返ってみると、母親が親しげに話しかけていた見知らぬ人物をいぶかしげに観察する少女の瞳があった。

将来的には神奈川と埼玉を結ぶこの新線は、また、予期せぬ新たな出会いの場となるかも知れない。

(淑徳大学国際コミュニケーション学部教授)



## 六義園散策

宮川葉子

駒込の六義園は国の特別名勝。

元禄十五年（一七〇二）に落成した池水回遊式庭園を持つ柳沢吉保の下屋敷。庭は吉保自らが設計した。五代將軍綱吉の寵臣として、とかくの噂がつきまとう吉保。しかし実はなかなかの勉強家。和歌や古典にも造詣深かったから、五万坪近い土地に和歌の六義（和歌を詠む際の六種の風体ふうたい）を取り入れ、和歌山県の和歌浦を写しとり造園したのである。

初期には園内に和歌上達の神様玉津嶋たまつしまの分身まで祀られていたし、四季折々の風情を和歌に重ね堪能できる工夫も凝らされていた。吉保現役時代は、おもに將軍の関係者や京都から下向の公家を招く迎賓館の役割を担ったが、宝永六年（一七〇九）、綱吉の薨去を機に引退して以降は、吉保の隠居所となる。そして正徳四年（一七一四）、吉保は五十七歳の生涯を同所に閉じた。その後、代々柳沢家の江戸屋敷として機能するが、明治初年、三菱の創業者、岩崎弥太郎の別邸となり、昭和初年には隣接地の大半が宅地分譲され、六義園はいわゆる庭園部分のみとなった。

「和歌の世界をこれほど見事に取り込んだ庭は京都にも類を見ない」と某公家をうならせた六義園。そうした歴史を踏まえつつの散策はいかがであるろう。

（淑徳大学国際コミュニケーション学部教授・

淑徳大学公開講座「源氏物語」講師）

## △立夏から盛夏の部▽

### 五月は菖蒲の季節

太田裕啓

現在、淑徳大学の公開講座にいけばなの講座を開いています。

器にははなを入れて飾ることは世界中で見られますが、それらは私達の違いなどは少し異なります。はなが綺麗だから眺めて楽しむ、自然界からあるいは栽培した花を切って部屋の中にも飾るわけですが、「飾る」と「活ける」ことの違いとも申しましょうか。

いけばなを活ける際にははなは、絵を描くときの絵の具とは違います。

白の桃は白の桃以外の何物でもありません。白の桃を「活ける」のです。はなと活け手が対等の関係にあると思って私達は、はなに接しています。日本に来た外国人で桜の開花が全国版のニュースに載るのを聞いて驚いた人がいるそうですが、私達は、木々が芽をふき、花が咲き、葉が繁り、紅葉しと何故だか一々感動します。自然との接し方がちがうのでしょうか。「春になれば芽が出て花が咲き、夏になれば葉が繁る、何がおもしろいんだ」と思う人もいるのでしょうか。ちょっと寂しいことです。

世は桜が終り一気に緑が濃くなって五月は菖蒲の季節、私達は気がききはありません。

皆さんも忙しい手をいつとき休めてはなを観てはいかがでしょう。

（いけばな五十鈴古流主宰・淑徳大学公開講座「いけばな」講師）

## 蜘蛛の糸

黒須秋桜

梅雨時、思いがけず目を楽しませてくれるものの中に「蜘蛛の糸」がある。日頃気づかずにいた蜘蛛の巣に、たくさんの滴が宿って美しい造形を見せる。

陽が射すと糸も滴も七色に輝きだして、更に目を奪う。

芥川龍之介の手によって操られた蜘蛛の糸は、短編小説『蜘蛛の糸』となった。数々の悪行ゆえ地獄に落ちた男が、蜘蛛の命を救ったことで、極楽から蜘蛛の糸を垂らしてもらった。男が上り始めると、数限りない罪人達が続いて上ろうとし、これでは切れると思って「おりろ」と喚いたとたん糸は切れ、自分だけが地獄から抜け出そうとした男も再び地獄へと落ちてしまふ。

人情の薄れた現代人には耳の痛いくだりである。

この小説は、大正七年に「赤い鳥」という童話雑誌で発表された。雑誌を創刊した鈴木三重吉が近くに住んでいたことに因んで、『赤鳥庵』と名づけた建物が目白庭園にある。回遊式日本庭園で池や滝があり、都会の喧騒を忘れさせてくれる。

小説の中では、地獄から極楽まで何万里も糸を上らなければならないが、ここは目白駅から五分。三途の川も金次第というけれど、庭園散策は無料。蜘蛛の糸を眺めながら、ひととき極楽気分にあひたれるかもしれない。

(香道古心流総師範・淑徳大学公開講座「香道」講師)

## 五月の歳時記

城崎陽子

五月の声を聞くと、鎧武者飾りに菖蒲を生けた光景を思い起こす方も多いでしょう。こうした光景を不思議に思ったことはありませんか。

我が国現存最古の歌集である『万葉集』には五月五日を「薬狩」の日と記しています。また、立夏に鳴くというホトトギスとともに菖蒲を「玉(薬玉)に貫く」という表現が五月の代表的な景物として歌に詠み込まれています。中国東南部の古い習俗を記した『荆楚歳時記』に「悪月」と記される五月は、身体の調子が崩れ、病にかかりやすい時期でもありました。中国の習俗を習い、奈良時代に整えられた日本の五月五日(端午)の行事が「薬狩」であり、この時節に香りの強い草花の力を借りて薬玉を作り、邪気避けることが行われた由縁もここにあるのです。

さて、「菖蒲」を用いてひたすらに身のケガレを祓い、健康と長命を願う心がいつしか武を尊ぶ「尚武」の心へと転換していきました。私たちのよく知る端午の節供の光景は、移り変わる歴史とともに変化してきた結果なのです。

(國學院大學講師・淑徳大学公開講座「万葉集」講師)

## 梅雨の始まる穴

山田喜美子

五月雨は内人ならぬ人もなし 正利

『毛吹草』という正保二年（一六四五）に出版された俳諧指南書に、こんな句が見えます。梅雨は六月の雨という印象ですが、旧暦では五月の雨でした。今でも梅雨はうつつとらしいものですが、道も舗装されていない時代では、家にこもりたくなつたことでしょう。

梅雨は、摂津国矢部郡丹生山田庄（兵庫県神戸市北区西部）の栗花落左衛門という人の屋敷にある水の湧き出し穴から湧いてくるという説がありました。江戸時代の百科事典『和漢三才画会』に載っていますから、広く知られていた話でしょう。立春から一三五日日（五月二十日ころ）に、この穴から水が湧き、栗の花が落ちて梅雨が始まり、梅雨明けには穴が乾いて塞がるというのです。今もあるものか、見に行つてみたいものです。

梅雨の雨といえば栗の花より紫陽花ですが、

紫陽草や藪を小庭の別座敷 芭蕉

という句がある程度で、今ほど人気のある花ではなかったようです。

うつつとらしいと言いなながらも、梅雨に雨が少なければ、夏の水不足が心配されます。

五月雨の晴まや龍のけつまづき 貞室

今年の龍神さまのご機嫌やいかに。

（俳諧史研究者・淑徳大学公開講座「徒然草」講師）

## 其角の五月雨

山田喜美子

長唄「菖蒲浴衣」の歌い出しに、

五月雨や傘につけたる小人形 晋子が吟も目の当たり・・・  
とあるが、実は、

五月雨やかかさにつる小人形

という句形が正しいらしい。「小人形」とはてるてるぼうずのことだろうか。晋子というのは宝井（榎本）其角の別号である。其角は、江戸に出てきたばかりの芭蕉に、わずか十四歳で入門し、その一の弟子として、俳諧の新風をさぐる師に従つて、盛名を挙げた。

十五から酒を呑み出てけふの月

の句で知られるように酒豪の蕩児であったが、芭蕉は終生その才と学識、風雅の志を愛した。其角もまた、時に謹厳な師を煙たがりながらも慕い、大坂で芭蕉が死の床にあつたとき、死の前日に駆けつけ、その死を看取つて『芭蕉翁終焉記』を著した。生粹の江戸っ子であつた其角の句風は、伊達好みで華やか、時としてこり凝りすぎて難解とされる。しかし、向島の三囲神社に雨乞いをしたとされる句、

夕立や田を見めぐりの神ならば

など、人口に膾炙した句も多い。雨にちなんだ句も多く、

傘にねぐらかさうよぬれ燕

も、五月雨の景であろうか。

一六六一年生れ、酒毒のためか、四十七歳で没したのも早熟の鬼才らしい一生である。

（俳諧史研究者・淑徳大学公開講座「おくのほそ道」講師）

## 歌謡曲の初夏

井口時男

東京の初夏を歌った歌謡曲はないかとあれこれ思い浮かべてみたが、これが案外みつからない。初夏と断定するためには「青葉」とか「風薫る」とかいう言葉が必要なのに、歌謡曲の詞は春なら花、夏なら太陽、と典型的な季節感を歌うので、初夏のような中間的季節感は避けられるようなのだ。

初夏のさわやかさということで、橋幸夫と吉永小百合の「若い東京の屋根の下」に当たりをつけたが、「春は芽ぐむお堀の柳」というから春。もうひとつ当たりをつけたのが、東京という明示はないが、藤山一郎の「青い背広で」。「青い背広で心も軽く／街へあの娘と行こうじゃないか」という歌い出しが初夏の感覚のように思ったのだ。だが、これも「赤い椿で瞳も濡れる」で春。

しかし、「青い背広で」はまちがいでなく、「ふらんすへ行きましと思へども／ふらんすはあまりに遠し／せめては新しき背広をきて／きままなる旅にいでてみん」とはじまる萩原朔太郎の詩「旅上」の歌謡曲への換骨奪胎のはず。そして、「旅上」はたしかに、「五月の朝のしのめ／うら若草のもえいづる心まかせに」とあって、初夏の詩なのだ。それが歌謡曲では春になってしまうのである。

(文芸批評家・東京工業大学教授)

## 初夏の池袋の思い出

岡本勝人

毎年、初夏になると、父親の亡くなったところのことを思い出す。その日、池袋の画材屋にたちよって、写真立てを購入すると、地下鉄に乗り込んだ。

池袋から要町へは、一駅だった。雑誌や写真でよくみる熊谷守一美術館を訪れる。鬚で顔を被った画家は、池袋モンパルナスの地に奥さんと暮して、家の庭から1歩も出なかった。簡潔な構図と色彩の絵を描いた。絵だけではない。画家には、『へたも絵のうち』というエッセイ集もある。老いて書いた書も、とても有名だ。白洲正子さんは、武相荘の床の間に、「ほとけさま」の掛け軸を飾っていた。

その日、電車を乗り継いで、父の病院に着いたのは、夕暮れだった。美術館で買い求めた絵葉書を写真立てに入れ、病室の机の上に飾った。その三日後の夜に、父は亡くなった。今年の初夏は、父の七回忌である。

(淑徳大学エクステンションセンター)



## 七月の歳時記―七夕の恋―

城崎陽子

七月の歳時記といえば「七夕」である。

彦星と織女の恋物語を語りつつ夜空を見上げる秋の行事は、『万葉集』の時代にさかのぼる。立秋を過ぎ、七夕の日が近づくにつれ、愛しい人に逢える喜びを「立ちて居てたどきを知らに（立ったり座ったりして、どうしていいかわからない）」（『万葉集』巻10・2092）と表現する。そして、いよいよその日になると、「天の川梶の音聞こゆ（天の川で梶の音がしている）」（同・巻10・2029）といい、「梶の音」で彦星が天の川を舟で渡って織女に逢う様を想像させるのである。

七夕の宵に宴を催し、詩や歌を詠むことは、万葉びとにとって最高の雅であり、「七夕の恋」はかっこうの歌材であった。こうした文芸の営みが、『文選』といった漢詩文の影響によることはあらためていうまでもない。

ところで、漢詩文において絢爛たる乗り物で鵲の橋を渡るのは織女であるが、万葉びとはこれを男の訪れを狂おしく待つ女として表現したのである。日本風のアレンジがいかなる理由によるかは定かでないが、「待つ女」の姿に万葉びとが心惹かれたことはまちがいない。ちなみに、短冊に願いを記す風習は、織女に学芸の上達を願った乞巧奠きこうでんの行事に由来する。

何百年にも渡る雅の行事が今に伝えられているのである。

（國學院大學講師・淑徳大学公開講座「万葉集」講師）

## 表装師の夏の宵の夢

長谷部雄三

八月、『夏雲奇峰多し』と詩にもありますが、入道雲が夏の暑さを象徴しているように思えます。暑中、安らぎのひとつときはと問われれば、宵の涼風を肴に冷たい一杯のお酒！そして、遠くから伝わる盆踊りの唄がかすかに聞こえればさらに嬉しくなります。また、秋を迎えるための季節であり、いろいろな展示会の案内状をうけとる季節でもあります。

毎年、水墨画を描く友人から展示会の案内を受け取ります。ある美術館で開催され、展示される作品も全て100号、200号以上と大画面の大作で圧倒されますが、展示場が広いので作品も大きくないと見栄えがしないという理由もあるとのこと、その友人に聞きました。「展示会が終わった作品はどうする？」「まるめて家の隅に置いておくだけで、まず飾ることもない」とのことでした。一年かけて制作した労作が7日程の展示会で終わってしまうことに、何か勿体なく、寂然としないものを感じております。私達、表装に携わる者にとって、掛軸という一幅の限定された面積にて制作された作品は、観る人にとって安心感があるようにも思えます。また、保存し易くそして何時でも鑑賞を愉しむことができる作品の制作を切に願っております。

表装師の夏の宵の夢です。

（表装文化伝承支援協会理事・淑徳大学公開講座「表装」講師）

## 衝撃から至福の時間へ

中村浩美

海外未経験の私が、ひょんなことから渡欧することになり、初めて降り立ったのがミラノでした。

朝もやの街を抜け、ドウオーモ前広場に着いたとたん、そこに私は立ちすくみ、心臓がバクバクと波うつのを抑えられませんでした。端から見ただけなら、口をあぐり開け、ボー然としていたことでしょう。私はドウオーモの正面をぼんやりと眺めながら、その壮大さ、荘厳さに圧倒されていたのです。大教会全体を覆う建築デザインの細かいこと、そして上部には天を突く無数のれつ塔があり、そのひとつひとつには聖人が乗っている、いや彫刻されているのです。よくわからないなりに身も迫るものがあり、これが今から70年も前に造られたものだと思いき、さらに衝撃を覚えました。こんな遙か昔の建物の前で、今を生きる人々が行き交い、集い、生活している…。脈々と続く歴史と共に、現代の我々が、ごく自然に、何でもないかのように、共存している…。イタリアって、なんていう国！

編集部の上で（当時私は雑誌編集者をしていました。）ぐずぐずと悩んでいたことが、取るに足らないちっぽけなことだと思えてきました。なんて私は井の中の蛙だったのだらう！

あの興奮から、早や25年。イタリア行脚は30回を優に越えます。今は、1000年の歴史を持つヴェネツィアンガラスを使いながら、至福の制作活動をしています。

（淑徳大学公開講座「ヴェネツィアンビーズ」講師）

## 出掛けよう！近隣公園と光が丘公園と和光樹林公園

西田俊夫

成増（板橋区）に縁があつて20年余りになるが、二つの近隣公園へ足を運ぶことが多い。公園には、凧揚げ、紙飛行機、ラジコンなどいろいろな遊びの達人がいる。職業や趣味も異なる人たちと知り合うこともできる。さらに、公園の中に身を置けば、自然に抱かれてファンタジーの世界に遊べば、少年の心に戻り、誰もが自然児になつていく。

その場所の一つは、「都立光が丘公園」である。成増駅南口（東武東上線）から健康速度で約10分、旧陸軍成増飛行場（米軍住宅地）の跡地に昭和五十六年「豊かな自然とスポーツ公園」をテーマとして、60.7haの都市公園が開園された。スポーツ施設のほか芝居広場、バードサンクチュアリ、光りのアーチなどを備えた総合スポーツ・レクリエーション公園である。

他方、「埼玉県営和光樹林公園」も成増駅南口から体力補強速度で約20分、キャンブ朝霞基地の跡地に平成元年開園（20.2ha）された。自然林（サクラ、アカマツなどの針葉樹やヤマザクラ、ミズキなどの落葉樹）のなかに足を踏み入れるだけで、何とも言えない馥郁とした香り、太陽の光、野鳥のさえずり、風や水の音などによって五感が研ぎ澄まされ、森林浴も味わうことができるアウトドアレクリエーション公園である。

二つの公園には、日常の素朴な自然と人との一体感があり、自然ウォッシングやスポーツ活動などさまざまな楽しみ、喜びを与えてくれる。楽しみの一つは、季節の移り変わりに敏感になれる。春には「サクラ」のトンネルをくぐれば別天地、夏の「木陰」のドームは衣服の清涼剤ともなる。秋になれば、樹々が一面に色づき、「紅葉」を一人占めができ、冬には「落



葉の中をウォーキング、ジョギングで汗を流し、自然と足も軽やかでハッピーな気分が味わえる公園である。

休日や自由裁量時間をもっと充実するために、私にとって公園は必須科目になっている。公園の楽しさ・おもしろさは、そこへ出掛けていって体験して初めてわかるのである。

(淑徳大学国際コミュニケーション学部教授)

## 池袋の場所の物語

芳賀 啓

池袋西口のメトロポリタンホテル裏から南東へ、JR山手線をくぐって雑司ヶ谷の脇を抜け、護国寺へ向かう音羽一丁目のまっすぐな通りを南下して江戸川橋際で神田川に注ぐのは「弦巻川」。

もう川跡さえ定かではなくなりましたが、明治も末年の地図で見ると、山手線の外側までその川の両側、狭い範囲ですが田圃がずうっとつづいていたのです。その川跡をたどって、途中雑司ヶ谷霊園の夏目漱石や泉鏡花、永井荷風といった人々の墓に詣でる路は、季節にかかわらず落ち着いた喜びを引き出してくれるものです。もし気が向けば、都電荒川線に乗って終点の早稲田まで行くか、あるいは反対に三ノ輪橋まで足を延ばして、吉原遊女の「投げ込み寺」として知られる浄閑寺を訪れるのもいいでしょう。「かつてあって、いまはない」場所をたどる時間は、私たちの「現在」を逆遠近法で照らし出してくれます。

都市の地形は、多く「坂」として語られてきましたが、その坂がつかないでいたのは谷と尾根という二つの地形でした。歩いてみれば池袋にも谷はあり、尾根は通っています。私たちが日頃意識しない都市の地形は、場所の物語を秘めて太古の昔からそこにあるのです。

(出版社「之潮(コレジオ)」代表・淑徳大学公開講座

「文学と古地図」で探る水際散歩」講師)

## 「短夜」と「宵は待ち」

山田喜美子

夏至は一年で最も日が長いのだが、なぜか「短夜」と言い、「日永」とは言わない。「日永」は春の季語である。暗い冬から日が伸びる感覚を重視したのである。一方六月になると、明け方四時ごろには窓の外が白々としてくる。「明易」<sup>あけやす</sup>いのである。

長唄に「宵は待ち」という短い曲があり、数え年六つでお稽古に上がると、初めにこの曲を習う。

「宵は待ち、そして恨みて暁の別れの鶏と皆人の憎まれ口な、あれ啼くわいな、聞かせともなき耳に手を、鐘は上野か浅草か」

あどけない顔で無心に唄うのが興なのである。譜で教えず、口ずから教える。私の師匠は「耳に手を」のところをいつも「耳に手も」と唄った。幼い日にそう覚えたのだろうか。

この曲は夏に限ったものではないが、それだけでなくともあつという間に過ぎる逢瀬の、特に夏の夜は無情でもあろう。シェイクスピアの「ロミオとジュリエット」でも、夏の夜の短い逢瀬と鳥の声にせきたてられる朝の別れの切なさが描かれている。

恋しい人を帰したくない女心と、明るくなつては人目を憚る自制心とに引裂かれる胸の痛みは、時代や国、年齢をこえて共通の感情であろう。

「宵は待ち」の歌詞の最後は芭蕉の俳句からとられている。

花の雲鐘は上野か浅草か

芭蕉が深川の庵から寛永寺と浅草寺の鐘を霞のむこうに聞いた句である。

(俳諧研究者・淑徳大学公開講座「おくのほそ道」講師)

## 墨と黒と水の力

近藤祐康

最近、国立上野博物館で「大琳派展」が開かれました。

琳派と言えば、日本美術史上、華麗さと装飾性に優れた流派です。今回の琳派展で特筆すべきは、やはり、宗達、光琳、抱一、其一の四人が時を異にして描いた、同一テーマの「風神雷神図」が同一会場に隣合せて陳列されたことでしょう。

この四者の作品を比較したところ、特に優れているのは宗達の作品でした。それは宗達の雷神の周囲を囲む雲が、水と墨と筆によって、実像の雷神に一段と動きを与えているからです。とりわけ、雷神の右手、風神の方へ向つてのびのびと蛇行する天衣の帯状の布は、水墨と黒によって濃淡に描き分けられ、まさに画竜に晴を点じた如く作品のスケールにより一段の生氣を与えました。

画面構成の大きさが全く異なる鈴木其一の作品は別として、光琳、抱一の作品はこの点、重厚に過ぎ、だるささへ感じられ、作品の清澄さ、明快さに少しく欠くところがありました。

華麗な色彩と装飾性は墨と黒と全く対峙する存在です。宗達はこの相反する両者を画面上に思う存分対話させ、日本美術史上に新しい世界をきり拓いた先駆者と言えましょう。

(書道一元会会長・淑徳大学公開講座「水墨画」担当)

## △立秋から晩秋の部▽

### 思い出の秋の味

赤崎美砂

秋になり風の涼しさを感じるとお汁粉が食べたくなる。学生時代にそんな気分になると行っていたのが小田急線豪徳寺駅前の「オジカ」だ。駅前にあった半円形のロータリーの向こう、一段低くなったところにあるその店を年配のご夫婦が経営していた。ふっくら甘く煮えた小豆と白いお餅が浅めのおわんに入って出てくる。「オジカ」のお餅はいつでも柔らかかった。お餅の柔らかさ或いは甘さがそうさせるのか普段甲高くなりがちな女友達とのおしゃべりもこの店に行くとなぜか落ち着いていた声になっていたように思う。

学校を卒業してから遠ざかっていたし、年月を経てそのご夫婦も引退されただろうと思っていた。ところが去年だったか、当時から友人が「オジカ」に行ってきたという。先代の義理の娘さんが再開したのだそう。私も先日行ってきた。残された荷物の中から先代のつけていた材料ノートが出てきた頃、近所から商売の再開を勧められ、思案の末、奥さんが店主になり「甘味おじか」を開くことにしたという。

木肌をベースにした店内にクラシックが流れる中、久々のお汁粉を味わった。お餅が柔らかい。昔も今も毎朝搗くのだそう。先代は臼と杵を使っていたと聞いて、贅沢な時間を過ごさせていたことを今更ながら感謝した。

(淑徳大学国際コミュニケーション学部准教授)

### 実りの秋に想う

阿部啓子

今年収穫されたブドウがワインとなり店頭に並ぶ頃となりました。発酵・熟成の期間が短くヌボーといわれるこのワインは清々しい味わいで食卓を賑わします。ヌボーは例外ですが、一般にワインは一年、三年、五年と熟成させた後飲み頃となります。

最近熟成ということを考える機会がありました。熟成の意味の一つに「物質を適当な温度などの条件のもとに長時間置いて、ゆっくりと化学変化を起こさせること」とあります。

個性をもったそれぞれの素材を同じ空間の中でゆっくり調和させると、旨味成分の詰まった味わい深いものが出来上がるのでしょうか。熟成はよく人の味覚や嗅覚によって確かめられます。そこには化学では言い切れない月日を作りだす「何か」が作用しているようです。酒、味噌、醤油、納豆、チーズ等々数えてみると身近には十分に熟された美味しい食べ物がなんと多いことでしょう。旬を迎えるには時間が必要のようです。香りの世界では香水やポプリもまた月日を重ねて熟成されるものです。月日によって醸し出された深い香りは人を魅了します。良い香りに心も癒されることでしょう。

季節が変わり人々の足どりも早くなりました。訪れる機会が増えた池袋の街が懐かしい印象になってくるのは月日の効果と感じているこの頃です。

(ジャパン・ハーブ・スクール講師・淑徳大学公開講座「ハーブ」講師)

## 秋の夜長は東方美人

小澤千恵

秋の夜長の過しかたはさまざま。音楽を聞いたり、映画をみたり、読書をした。

源氏物語「鈴虫」の巻にもあるように、平安時代の貴族は、美しい虫の鳴き声を聞いて過ごすために庭に野を作り虫を集めたり、籠に入れて御殿の中で眺めて楽しんだりしたという。

私が銀座和光でバイヤーをしていた頃、秋によく売れた商品のひとつに、駿河竹千筋細工の虫籠がある。

駿河竹千筋細工は、徳川家康公が將軍職を退いて駿府城に入城した時、大好きな鷹狩りのために餌箱を竹細工で作らせたのが始まりで、菓子器や花器などを中心に駿府で伝わる工芸品だ。今日も、いわゆる日用品とは違う趣味趣向性が強い品が好評で、中でも虫のひげを痛めないという繊細で優美な曲線が特徴の虫籠は有名だ。中に入れる鈴虫やくつわ虫などの虫も竹で作られており、美しい声が聞こえてきそうな精巧さは秀逸だ。

秋の夜長に虫を愛でながらいただくお茶は、香りが素晴らしい台湾の「東方美人」を選びたい。茶葉にウンカという虫をつかせてその噛み傷と分泌液から香りを生み出す、いわば虫の力を借りて完成したこのお茶は、深まる秋を感じるのに最適だろう。

(淑徳大学公開講座「器」講師)

## 武蔵野の原

黒須秋桜

先日、豊島区のオリジナル切手が販売され、その「すすきみみずく」の意匠に目が留まった。雑司が谷の鬼子母神で、安産や魔よけとして昔から売られていたもので、薄の穂で羽毛感を出しながらうまく束ねられ、とても愛らしい。

武蔵野の薄がこんな形で息づいていた、と思えて妙に嬉しく、早速、インターネットで探すと、写真入で作りが紹介されていた。作れそうだし、しかし子供の頃は身近にあったはずの薄の原が、存外ないことに気付かされた。

かつて、「武蔵野は月の入るべき山もなし、草より出でて草にこそ入れ」と詠まれ、その情趣は平安貴族に受け入れられて、絵や歌にとりこまれた。「山より出でて、山にこそ入れ」があたりまえの都人にすれば、広がりへの憧れも相俟っていたのかもしれない。江戸期の農地開拓で肥料の落ち葉を得るために雑木が植えられ、武蔵野といえは「雑木林」のイメージに塗りがえられては行つたが、それでも、あちこちに原は残っていた：はずだった。

鬼子母神の「すすきみみずく」は、どこの薄で作られているのか：。河原へ足を伸ばせば、ありそうな気がする。集中豪雨情報に気をつけて、多摩川か入間川あたりにでも出掛けてみようか。秋の一日、武蔵野の原を思いながら、「すすきみみずく」作りに挑戦してみたい。

(香道古心流総師範・淑徳大学公開講座「香道」講師)

## 運動会とペン習字展覧会

林 拓鷺

毎年秋に書作の展覧会をやっている。銀座の小学校前にあるギャラリーを借りてカルチャーや各お教室の方々とグルーブ展である。

まだ蟬の声も喧しい頃の会期だが、毎年その小学校は秋の運動会の練習の真つ最中で、4階にある会場への廊下からその練習風景がよく見える。蕨のからまる校舎に囲まれた小さな校庭では、毎時間学年の違う先生や生徒が、たいていはお遊戯の練習をしている。それぞれの学年の先生の指導のもとに、もうほとんど振り付けを覚えた生徒達が最後の仕上げをしている。学年に合わせた選曲は見事でドラマやコマーシャルで耳にする曲であったり、ちよつとなつかしい歌であったりする。音楽に合わせて一生懸命踊っている様子に心が和む。突然降り出した雨で雨宿りをして心配そうに空を見上げている先生や子供達。学校教育や教育関連の不祥事が色々と取りざたされる昨今だが、そんな風景を見ていると「何にも心配ないわ。大丈夫！」と心から思える。

また来年も一年学年の上がった子供達の練習を見ながら、一年歳を重ねた私たちも展覧会を楽しめますように…と雨のあがった空に願いをこめる。小さな小さな歴史である。

(淑徳大学公開講座「ペン習字」講師)

## 中国大陸でみた月

城崎陽子

仲秋の名月は中国・貴州省の黎平で眺めることとなった。

少数民族の共同調査終了を祝って杯を傾けた後、月餅とともに仲秋節の食物として欠かせない「酒そう」という酒粕でつくった白玉入りの粥を食べた。甘い香りと、白玉のツルリとした食感がなんとも言えない味わいを醸し出していた。

夜も更けたころ、円かな月を見上げながら、調査団の中国側代表であるT先生が故事を引きつつ別れの挨拶を述べられた。「幾千里離れていようとも、同じ月を眺めていれば、私とあなたの心は一つです…。」

「あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」、千数百年の時を遡ったこの大陸で、同じように月を眺めながら遙か故国へ思いを馳せたのは阿倍仲麻呂である。『古今和歌集』鞆旅歌冒頭に納められているこの歌はあまりにも有名だ。留学生として唐に渡り、一度は帰ることを諦めてしまった仲麻呂に、唐土に派遣されてきた遣唐使達と帰国するというチャンスが再びめぐってきた。この一首はその饞別の宴で詠われたものと伝えられている。故郷で見た月を思い起こしつつ、その一方で、「同じ月を眺めていれば…」という思いが仲麻呂の心にもよぎることがあったのだろうか。

(國學院大學講師・淑徳大学公開講座「万葉集」講師)



## 寒い冬は八宝茶でおもてなし

小澤千恵

中国茶のひとつ、八宝茶をご存じだろうか。

様々な薬効のある乾物と、ひとつまみの茶葉を蓋碗に入れて飲む、具沢山のお茶で、極寒の時期に向いている一種の健康茶だ。

作り方は簡単。お盆の上に豆皿を並べ、色とりどりの八種の宝物を入れておく。クコの実、紅なつめ、白きくらげ、干しブドウ、菊花、さんざし、水砂糖、龍井茶（緑茶）など。使う茶道具は蓋碗のみ。

ゲストが来たら蓋碗を渡して、好きなものを好きなだけ入れてもらいお湯を注ぐだけ。それぞれが自分のブレンドを作り、蓋碗の中の様相もさまざままで楽しい。水砂糖が溶けるまで何煎でもお湯をさして飲むことができ、ゆつくりと暖かい部屋でくつろぐ時間にぴったりのお茶だ。

そして、このお茶にお勧めの蓋碗は、フランス、レイノール社のシ・キオン柄チャイニーズティーカップ。

美しい白地と自然な色彩の絵柄が料理を引き立て、多くのレストランに愛されるレイノールの器の中でも、東洋のデザインから影響を受け、山水画をモチーフにしている「シ・キオン」は、ティファニーのテーブルセッティングの本にも使われて、世界的にファンの多い絵柄だ。中国の黄河流域の地域の名前に由来するシ・キオンの蓋碗に、中国の健康茶、八宝茶を淹れて、今年の冬を乗り切ろう。

（淑徳大学公開講座「器」講師）

## お箸の国のかたすみで

川口晴美

アメリカ大統領選で楽しそうに（勝手に）盛り上がっていた福井県小浜市は、私の出身地だ。少し前に放映されていたNHKの朝の連続テレビ小説『ちりとてちん』の主人公の故郷でもある。そのドラマにも出てきたように、若狭塗箸が名産。この前、「若狭塗箸利用促進運動プロジェクト実行委員会」から、マイ箸モニターをやりませんかというお手紙とともに、若狭塗のマイ箸セットが送られてきた。

私は子どもの頃はもちろん、東京で暮らしている今も家では若狭塗のお箸を使っているので、大歓迎。以来、鞆の中にはいつもマイ箸を入れている。外食のとき、割り箸を手にしそうになってから、おっといけない自分を持つているんだとと優美で艶やかな箸をおもむろに取り出す。誰かといっしょに食事する際にはとくに忘れてはいけない。エコというより広告宣伝である。あるいは普及活動。カレーやイタリアンを食べるときに出番がないのが残念になってくる。

年越し蕎麦やお節にお雑煮、年末年始はお箸が活躍する季節。そういう国に住んで、そういう食べ物でつくられた体で、生きているんだと実感する。忘年会や新年会でも、マイ箸を披露することにしよう。

（詩人・淑徳大学公開講座「詩」講師）



## △立冬から晩冬の部▽

### 東京の初雪

川口晴美

非常勤講師をつとめている大学で、授業のあと何人かの女子学生と教室で雑談していた。就活しているけれど面接に落ちてばかりで疲れちゃいましたとか、お正月休みに徹夜で小説を書いてライトノベルの賞に応募したんです一次予選通ればいいとか、囀るように生命感をあふれさせる彼女たちの声に應えている途中で、「あ、雪ー」と一人が指さしたと思ったら三人が羽ばたくように窓際へ走っていき、それまでの会話とは何の脈絡もなくはしゃいだ声で笑った。

朝から冷え込んでいたその日、お昼過ぎになって東京にも初雪が降ったのだ。曇り空から落ちてくる白片はたぶんすぐ雨になるだろうとぼんやり見ていたら、先生はご出身どちらですか、と窓へ走らなかつた一人にたずねられた。福井県小浜市なのと答えると、わたし福島ですとその子は微笑んで、ゆっくり窓の向こうの空を見上げた。

生まれ育つ間に何度も経験すれば、それはめずらしいものではなくなる。でも、雪も雨も日の光も、本当は奇跡のように存在しているのだ。生きていく限り何度でもそれを思い出さなければ。初めて世界に触れたみたいに窓ガラスに顔を寄せて熱心に雪を眺める女の子たちの背中を見つめながら、そう願った。

(詩人・淑徳大学公開講座「詩を書く」講師)

### 雪への思い

北潟喜久

近年、地球温暖化の影響からか、東京ではあまり雪が降らなくなった。江戸時代はもっと降っていたと思うが、それでも、歌舞伎の舞台で降る雪の回数には遠く及ばなかつた。

十一月は歌舞伎界のお正月にあたる顔見世興行の月だが、この時に上演される芝居では、二番目序幕は裏長屋などの場面で、必ず雪が降っていることという奇妙なきまりがあった。長野県の阿南町で、初春に行われる「雪祭り」というお祭りでは、雪がない年には、「大雪でございます」と人々が叫びあう。

なぜお正月に雪が必要なのか。我々の先祖は、一面を銀世界に染める雪を、一面を黄金色にする稲の実りと重ねあわせて考えていたようだ。お正月に雪が降るということは、その年の豊年満作を神さまが約束してくれたことであり、めでたい。だから雪が降っていないなくても、舞台上に雪を降らしたり、「大雪でございます」と叫んだりするのである。神さまには「きつとだよ」と念を押ししたいから、歌舞伎の舞台では、お正月どころか、年中雪また雪である。

雪が降ると、何かワクワクするような気持ちになるのは、雪降りを歓迎した先祖からの遺伝子のせいだと思う。

(芸能研究家・淑徳大学公開講座「歌舞伎」講師)

## 安政の大地震と鯰絵

野田茂徳

安政二年乙卯（きのとう）十月二日（西暦一八五五年十一月十一日）夜四ツ半頃（午後十時頃）M6.9の地震が発生した。いわゆる「安政の大地震」である。その前年十一月四日には駿河、遠江、伊豆、相模で東海大地震、五日には「安政南海大地震」が続いて起きた。

当時の庶民にとって、地震の発生のメカニズムは理解できるものではなかった。庶民は日常の生活のなかで地震の前ぶれのようなものを感じていたが、科学的思考でなかった。しかし、ヒトはもはやその能力を失ってしまったているが自然界の生きものたちにとっては地層のせめぎあうエネルギーが発するものは、かれらの感覚には轟音となって伝わっているのである。自然界の生きものたちは、地下から発せられるただならぬ音にすばやく反応し、危険を察知していつせいに避難する。

たとえば江戸の庶民になじみぶかい水中の鯰（ナマズ）の敏感な行動とて例外ではない。地震の発生前に、地下からの激しいエネルギーを感受した鯰のただならぬ行動を見て、鯰がその後の地震を引き起こしたものだと考えていた。

安政の大地震の記録は多数残っているが、江戸の庶民にとっては地震そのものの被害より、地震の後、江戸の各地で発生した火事による被害が甚大であった。

安政の大地震と鯰の関係を、諧諷を弄したものに「鯰絵」がある。これは江戸時代、天変地異、火事、心中などを速報体制で印刷していた「かわらばん」のいうなれば多色刷りの特別版である。「鯰絵」には被災した江戸の庶民たちの笑いと涙を、再生の方に向かわせる余裕さえうかがわせるものがある。

（筑波大学名誉教授・淑徳大学大学院客員教授）

## 大寒の寒稽古

櫻間金記

寒声や目鼻そがるる向こう風 青木月斗  
二十四節気の大寒にあたる寒さ厳しいこの時季、音声を鍛える目的で、早朝に謡の稽古をする。寒稽古とも寒声とも。

二十才半ばの頃。仲間と現行曲（現在舞台上で演ぜられている曲目―百五十番程―）を全曲謡ってみようと、四・五年かけて寒稽古をした。能の寒稽古は冷たい能舞台の板の上に正座して、一曲を素謡（台本を役に分けて器楽演奏なしに謡う）形式で行う。因みに、暑中稽古は大暑の暑い盛りには、舞を舞って動き回り汗を流す。皮肉な稽古法といえよう。平均四・五十分の曲を三・四番謡うのが、寒稽古一日の課題となる。

当時の師匠の舞台は本来の野外舞台と同じ造りなので、冷氣寒風が容赦なく吹き込んできた。通常舞台では、用のない時は袴の中に手を入れていく。役の謡になって扇を構えるために、袴から手を出す名残惜しさ。正座なので当然のこと足が痺れてくる。でも、足を組み替えたり体をぶらすことは、絶対にしない。何故って、折角体温で舞台の板が暖まったのに、足をぶらせばそこへ冷氣が入ってきて、また冷たい思いをしなければならぬから……。  
痛くても我慢々々が寒稽古。

（金春流能楽師・淑徳大学国際コミュニケーション学部講師）

## 韓国逍遙

城崎陽子

「東アジア」という言葉のもと日本の古典文学を今一度考えはじめてから韓国に足を運ぶ機会が増えた。間隙をぬって出かけた今回の旅は百済の都「扶余」を訪れることがその目的であった。

吐く息が白く凍る朝、ホテルを出発して、一路扶余をめざす。二時間半の道程は、まどろんでいるうちに過ぎていた。

朝靄のなか、百済式伽藍をもっていたとされる定林寺趾の石塔や石仏を見て回る。形は日本の五重塔と同じ。しかし、石組みの石塔は戦火に焼かれ、崩れ落ちていたものを復元したのだという。

朝鮮式山城である扶蘇山城は、百済の王宮があったところで、百済滅亡に際して、3000人の宮女が白馬江（白村江）に身を投げて亡くなったとの伝えが残る。そこに建つ「百花亭」から見下ろす白馬江の名の由来は、唐の將軍が難攻不落の扶蘇山城を攻め落とすため、河に棲んでいた龍を白馬で釣り上げたからとか。

王陵の谷である陵山里古墳群では飛鳥の古墳壁画の源を見た。こんなにも近い文化を持ちながら、百済の都は哀しげだ。

日本書紀に残る百済滅亡の記事は語るも無惨な歴史である。一度滅んだ国を建て直し、救援を求めてきた忠臣は、再び戴いた王に疑われ、殺された。不吉な前兆が続く中、救援に向った日本の天皇は九州の地で亡くなり、その葬送は鬼が見送ったという。韓土を目指した多く兵も、天を振り仰ぎ、歯がみしつこの地で亡くなった。

ソウルにもどると、旧正月のイルミネーションが美しく輝いていた。1300年の歴史と現実の狭間を「東アジア」という言葉一つで埋めるのは難しい。

（國學院大學講師・淑徳大学公開講座「万葉集」講師）

## 高尾山の「火渡り祭」と修験道

西村敏也

三月十四日、淑徳大学公開講座「日本の山岳宗教―修験道の世界―」の見学会がおこなわれた。場所は、修験道の霊場として知られる高尾山薬王院。フランスのミシュランガイドブックで三つ星観光地として選ばれたため、多くの観光客が訪れる一大観光地ともなっている。都心から、手軽に訪れられるということもあってか、さながら、参道は東京の街並みのような賑わいであった。担当講師の乾先生と共に山内散策、本堂の御護摩修行拝見後、客殿で精進料理に舌鼓を打った。お寺のご配慮でお酒をいただき、ほろ酔い気分で、「火渡り祭」会場へ向かった。定刻を過ぎてから到着したが、あまりの人の多さに仰天。柴燈護摩が点火され、燃え上がる炎に、春の訪れを感じた。その後、ならされた火道を、多くの人々が、神妙に、それでいて楽しげに渡っていく姿がうかがえた。

近年、修験道の盛況ぶりは、様々なメディアでも取り上げられている。神仏分離を押し進め、呪術的なものを排した維新政府は、明治五年に修験道廃止令を發布する。太平洋戦争後、信教の自由が保証される中で、修験道は復活を遂げた。荒々しく、そしてすがすがしい修験道は、逼塞した現代社会で右往左往する人々に、一服の清涼感と癒しを与えているのかも知れない。「火渡り祭」に魅せられた人々が、満足げに家路に就く姿が、それを物語っているようだった。

（武蔵大学講師・淑徳大学公開講座「日本の山岳宗教―修験道の世界―」講師）

## 寒い冬は気功でパワーを内に蓄える

服部茂夫

冬は万物が静かに沈みこむ時期で、陰を養う季節。

養陰とは自分のパワーを守ること。食べ物は鍋物など栄養のたっぷりある陽の食べ物や沢山とり、養うのは陰の気だ。朝はしっかりと食べ、冷たい物を避け、腹巻・マフラーを着用し、下着は体を締めつけないものを選ぶ。入浴は湯船に入り、眠る前は体を温め、早めに寝る。睡眠は八時間とり、口呼吸はやめ、鼻呼吸を励行し、骨休めする。

養生法は、震動功・タントウ・呼吸法・瞑想など。

第一に、肉体を構成する細胞を活性化するため、全身をぶるぶる小刻みに揺らす。とても心地よい気分になれば、体中の毒気も同時に出すので爽快な気分をもたらす。第二に、立式の調身姿勢をタントウと呼ぶ。樹木の幹を抱きかかえるような姿勢をとり、立禅となる。成長速度が遅く、緑も濃い、密度が高い松の木の前で行うと陰のパワーを多く補充できる。第三に、呼吸法のコツは古いものは吐き出し、新鮮なものを取り入れ、細く・長く・ゆっくりに同じスピードで長息し、全身の気血の流れをよくすると長生きできる。最後に舌は上顎につけ、だ液を呑み込み、へその下にある丹田に意識を集めて瞑想する。

こうして、パワーを内に蓄え、冬を乗り切ろう。

(淑徳大学公開講座「気功」講師)

## △それぞれの羈旅<sup>きりよ</sup>および雑歌の部▽

### 逆境にチャンスあり

秋山幸子

全世界的な規模での不況社会に突入してしまった感が否めない今日この頃です。働く人の日々の生活も、変化し続けているのが現状です。不況の時代に限ったことではありませんが、企業が健全に継続していく際の重要な課題の一つに『社員の育成』が挙げられます。これは、お金を判断基準に考えていては成し遂げられない企業の課題と言っても過言ではないでしょう。

昨年から少しずつ広まってきた『ワークライフバランス』とは、仕事と生活の調和を意味しています。しかし、それを企業や組織の中に取り入れ上手く循環させるには、時間もまだまだ掛かりそうであり、机上の空論か安易な理想論で終わってしまいそうな心配さえあります。

昔から、逆境にチャンスがあると言われていますが、この不況下にこそ『企業の健全性』を確立できるチャンスがあるとも考えられます。企業の運営に欠かせない『健全なメンタリティとモラル』を併せ持った社員の育成は、まさに今後の『日本社会を支える人間力』の育成に繋がるはずですよ。

国際的に活躍できる自立(自律)した社員を育てることは、今この日本社会に存在する全ての企業に課せられた、社会的責任であると認識したいものです。

(秋山総合心理研究所所長・淑徳大学公開講座「ワークライフバランス」講師)



## 生老病死における「氣」の活用

岡村 隆二

「氣」とは生命力です。

この大自然に充ち満ちている「生命エネルギー」を、自分の中に取り込んで、生命力を最高に高めて、人生万般に「氣」を活用する方法があります。人間には、「物体である「身体」と、「物体ではない「心」とがあります。

「身体」と「心」は、性質や関係が全く違います。

人間の「身体」と「心」の関係は、氷山に例えられます。

氷山の目に見える部分は、氷山全体のほんの一部分であり、大部分は水面下に隠れています。

私たちが「自分の力」と思っているものも、実は氷山の一角に過ぎず、もっと大きな力が目に見えない所に隠れているのです。

氷山の目に見える部分が「身体」で、水中の目に見えない部分が「心」です。

『「心と身体」を一つに統一』として使った時に、身体にも好影響を与え、氷山全体の力が発揮されます。この時、我々の生命力が最高に活動し、自分の持っている総合力が発揮されるのです。

この総合力が「人間の本来の力」です。この力は、人間誰でも一様に持っています。

(NPO法人「氣の活用法」理事長・淑徳大学公開講座講師)

## 東京駅の赤レンガ

岡本勝人

東京駅が、平成になって、おおがかりな改修工事をすすめている。

日本の近代建築の開拓者である辰野金吾が設計した駅舎は、東京空襲で三階が焼けると改修されて再建された。戦後生まれのわたしたちが知る東京駅は、二階建てで八角塔のある赤レンガの風景である。

船が水路を走るオランダのアムステルダム。中央駅にたらずんで、東京駅のモデルといわれる駅をみた。今回の工事で知ったが、戦前の東京駅は、グリーン色の円筒型の屋根をもつ三階建ての駅舎だった。モデルとなったアムステルダムの赤レンガの駅とは実は異なった風景だ。おおくの利用客に親しまれた旧東京ステーションホテルも、駅舎のなかで新装あらたになるにちがいない。

フランス文学者の辰野隆は、辰野金吾の息子である。小林秀雄は、辰野隆の自宅文庫を「貸出し自在の図書館」として利用した。貴重本に線を引きいたり、ページを切ったりしたが、恩師の辰野隆は、それを勉強している証拠とみて、貸し与えつづけた。小林秀雄だけでなく、鈴木信太郎、渡辺一夫、今日出海、三好達治、森有正などの優れた人物を育てた。

ツインタワービルを背景に、平成の東京駅は、大小のビルに囲まれて、おおくの利用客やビジネスマンが集る。まるで、辰野金吾や辰野隆の周辺に多くの才能ある人物が集ったようにである。

(淑徳大学エクステンションセンター)

## 平家物語と地名

菊田 均

現在、淑徳大学公開講座で『平家物語』を担当している。この物語は、平家の滅亡をテーマにしたものだから、西日本が舞台になることが多い。が、最終的に平家を滅亡させたのは、源頼朝だ。鎌倉を根拠地とした彼には、関東の武士団が従っていた。彼等の働きなしに、平家滅亡⇩鎌倉幕府の成立という、歴史の大変革はありえなかった。

関東武士団の名前を見ると、地名で残っているケースが多い。例えば、豊島清光。

武蔵国豊島庄を領地とした彼は、一一八〇年、頼朝の要請に応えて、最も早く頼朝に従った。

息子清重は葛西氏を起こした。葛西の地名は、現在江戸川区に残る。

足立郡の足立遠元も、早くから頼朝に協力した武士だ。足立区という地名で残っている。

横山時広も、現在の八王子市に横山という地名があるように、当初から頼朝に従った。

江戸重長はじめは反抗し、後に頼朝に従った武士だ。明治元年七月、東京という名前に変わるまで江戸であったのは周知の通り。

八百年以上も前の歴史が地名として残っているのを見ると、源平争乱の昔もそんなに古いことではない、と思えてきて面白い。

(文芸評論家・淑徳大学公開講座「歴史と文学」講師)

## 人気の歴史散策

関戸堯海

最近、ウォーキングや歴史散策に人気があるそうです。上野の東京国立博物館の「スリランカ・輝く島の美に出会う」の展覧会に行きました。本館地下のミュージアムショップに立ち寄ると、古寺巡礼に関する本が多いのにビックリしました。それから、江戸東京博物館の「浅草今昔展」に行きました。ここでも、江戸の古地図をもとにした歴史散策の本が多くて、再びビックリしました。

淑徳大学公開講座で「名句でよむ法華経のおしえ」を立正大学名誉教授の渡辺宝陽先生と担当し、各季ごとに古寺巡礼(史跡散策)を実施しています。JR池袋駅東口すぐ、淑徳大学サテライトキャンパスには、真摯に学ぶ聴講の方々が集まっています。みなさん由緒ある寺院や、風光明媚な史跡に興味をお持ちのようです。

十二月十日には、鎌倉の霊跡本山妙本寺を参拝し、日蓮聖人の辻説法の跡地を見学する予定です。このあたりには、ご草庵があったといわれます。そして、名越の切り通しは、東関東・房総との交易の要衝で、人通りが多かったそうです。布教の拠点として最適で、このような史実を知るためには、下調べと現地の見学が重要です。

また、仏教の經典の内容を知った上で、寺院や史跡を見学することによって、さらに深く理解することができますでしょう。

(立正大学日蓮教学研究員・淑徳大学公開講座「法華経」講師)



## そのときどきの歴史散策

関戸堯海

JR池袋駅東口からすぐ、淑徳大学サテライトキャンパスにて、立正大学名誉教授の渡辺宝陽先生と公開講座を担当しています。「名句でよむ法華経のおしえ」という講座ですが、熱心な聴講の方々と一緒に、楽しく勉強しています。

法華経は、文学的にもすぐれていて、源氏物語に取り上げられるなど、日本文化に大きな影響を及ぼした経典です。

あわせて、寺院とその周辺を歴史散策しています。池袋駅の近くに雑司ヶ谷鬼子母神があります。子育て安産にご利益があり、とくに江戸時代には多くの参詣者でにぎわっていました。おもちゃの風車や、みみずくの麦わら細工などが知られています。今は、ビル群の真ん中にありますが、直角に折れ曲がる参道の街路は、江戸名所図会そのままです。けやきの並木も健在で、往時がしのべれます。

こんどは、松戸の平賀本土寺を参詣します。水戸街道から枝分かれした参道は、今は常磐線に分断されていますが、松や杉の大木が連なり、東京国立博物館所蔵の五街道絵図そのものです。起伏に富んだ地形と、桜・かえでの美しさはことさらです。紫陽花や菖蒲で有名なお寺なので、歴史散策による知的満足を得られると同時に、季節の花々と緑の木々の美しさを楽しめると思います。

(立正大学日蓮教学研究所研究員・淑徳大学公開講座「法華経」講師)

## 「ドロッカー生誕100年〜明日に羽ばたく」

宗 初末

みなさんはP・ドロッカーをご存知ですか？マネジメントの父、経営コンサルタント、大学教授、社会生態学者として世界的に有名な方です。今年、二〇〇九年へ生誕百年Vになります。わたしがドロッカー氏を初めて知ったのは一九六九年に刊行された『断絶の時代』（ダイヤモンド社）です。丁度四十年前になります。一九七八年三十歳の時、池袋サンシャインビルが建ち、二〇階に入居した株式会社ジェックに入社しました。創業者社長が故宮本義臣氏はドロッカーの大ファンでした。毎日のように「ドロッカーの言っている通りの経営をする」、「ドロッカーの経営哲学をすべての研修コースに取り入れる」と言われていました。

一九八五年にジェック創立二十周年講演会が開催されました。ドロッカーを招いて講演をお願いしたのも懐かしい思い出です。以来、二〇〇七年六〇歳の定年まで同社に勤務しましたが、考えてみると三〇年間ドロッカーの経営哲学をベースに仕事をして来たことになりました。

日本の経営者にはドロッカーのファンは数多く、ユニクロの柳井社長、山崎製パンの飯島社長、イトーヨーカドーの伊藤名誉会長はドロッカー流の経営をされていてそれぞれ、経営が順調です。ドロッカーは何を考え、どうすれば良いかの指針を与えてくれます。

(ドロッカー学会推進委員)

## 一生感動 一生青春

戸口勝正

南池袋で、介護サービス会社を経営しております。会社の近くには、「シアターグリーン通り」というストリートがあります。JR池袋駅から徒歩5分の都会の喧騒の中にあるとは思えない所に、寺院がストリート沿いに並び、見るものに威厳を感じさせます。

その寺院に挟まれるように聳え立つ、名前の由来である『シアターグリーン』の前を通ると、劇団の若者が会場の準備で忙しく動き回っている光景によく出会います。おそらく、ほとんどの若者が、アルバイトをしながら生計を立てていると推察される中で、誰もが目が輝いて屈託のない笑顔で楽しそうに仕事をしているのです。お金ではなく、好きなことに熱中できる充実感・達成感がそうさせているのでしょうか。

普段仕事に追われてあまり余裕のない日々を過ごしている私にとって、一服の清涼感があります。そして書家「相田みつを」の「一生感動 一生青春」という言葉をいつも思い出します。年齢に関係なく、毎日何かに感動している、そんな人生を送る限り、ずっと青春なんだと。

このストリートを通る度に会おう何気ない光景に、あたりまえの幸せを感じながら今日もありがとうと、感謝しながら通過していきます。

(株)ケアリッチ代表取締役社長・淑徳大学公開講座「風水」講師

## ALWAYS写真事始

永島浩二

昭和三十三年頃の東京を映画にした「ALWAYS三丁目の夕日」は、庶民の生活様子を描いた話である。当時小学六年生の私は、ある菓子メーカーの景品で玩具カメラ「スタート35」が当たり届いた。そのカメラで近所の遊び仲間を撮って遊んでいた。

中学生になると油絵と写真に夢中になり親にカメラを買って貰い興味あるものを撮影していた。撮影済フィルムは池袋三業地商店街中程にあったDPEキジマフォト店に出していた。

中学二年の関西修学旅行で撮影した白黒フィルムを現像と名刺判写真を頼み、出来上がり日に受け取りに行くところ撮影の失敗がなくDPE料金が六千円である。驚き、家に戻り親に出して貰ったが、後で凄く叱られた思い出がある。

大学は進路変更して写真学科に入学した。桃、桜が咲く頃はカメラを首に下げて池袋駅周辺をあちこち歩き廻り街を撮影していた。

五十年後、当時のフィルムを見ると池袋の街は一変した。戸建の庭付き木造家屋は極端に減少、細分化され新建築かマンションに変わっている。

写真も技術革新で銀塩写真からデジタル写真となり携帯電話のカメラで手軽に写真が撮れる時代となった。

いま撮影者は豊かな感性と社会性モラルが必須要件となる。

(写真家・淑徳大学公開講座「写真」講師)

## 青春の油絵と写真

永島浩二

昭和三八年（一九六三）十二月、東京オリンピックを来年に控え、池袋の街も騒がしくなっている。

憧れの林武先生が指導する芸大を目指し高校二年の小生は北風が吹き抜ける都電池袋駅（現、グリーン通り交番辺り）から竹早町へ行き文京区水道端の名門美大予備校「すいどーばた洋画会」夜間部へ通っていた。（後に目白に移転、現・すいどーばた美術学院）芸大入試のために実技の必要があり、デッサンは古代ローマ彫刻複製石膏像を正確に立体的に写し描き、油彩で人物を描く実習していた。しかし、何か新しい絵とは何か無いかなど考えている時、銀座の洋書店で画集、写真集を見ているとマン・レイが撮影した女性ポートレイトのソラリゼーション写真を発見、今までの写真とは違う。彼に興味を持ち、パリで活躍するシニールレアリズムの写真家・画家であることが判り、進路変更して日大芸術学部写真科に進み写真を学ぶことにした。

授業の他に宿題テーマ写真があり、課題「ふるさと」で池袋の街を気の向くまま徘徊して新しい発見の撮影を始めていた。

夏休みは撮影旅行と秋の公募独立美術展のためにF百号の油絵三点を描き上げ搬入、高校時代から連続五年入選して会友となり油絵と写真の青春を過ごしていた。

（写真家・淑徳大学公開講座「写真」講師）

## 一九六〇年代の新宿のバー

「ナルシス」「カヌー」「茉莉花」「風紋」の記憶

野田茂徳

かつての新宿で「バー」といえば、東口の「ナルシス」、「カヌー」、「風紋」、「ナジャ」そうして西口に「未来」茉莉花」等が思い出される。どの店にもそれぞれ特徴があり、客人たちがお互いに楽しくまた激しく議論していた。「ナルシス」では詩人や、編集者たちとよく会ったが、とくに辻潤と伊藤野枝の長男の辻まこととよく出くわした。彼は気軽に得意のギターを奏でてくれた。

「茉莉花」は戦後文学の旗手たちが常連であった。野間宏は酔いがまわると、大真面目な顔になりママとひたすダンスに興じていた。「茉莉花」には「昭和文学全集」の作家・詩人たちが入その場Vに存在していた。

「カヌー」のママには華があった。ママはかつてに日劇ミュージックホールで丸尾長頭がそだてたダンサーであった。「カヌー」は新宿2丁目の道路に面したところにあった。六〇年安保闘争敗北の気だるい雰囲気はまだ残っていた頃、瀧澤龍彦が翻訳したマルキ・ド・サドの『悪徳の栄え』が「わいせつ文書」として東京地検によって告発された。裁判がはじまると埴谷雄高、白井健三郎、遠藤周作が特別弁護人になり、裁判はいつ終るともなく続いた。当時、「カヌー」では、「サド裁判」特別弁護人をはじめ出版社の「現代思潮社」の関係者たちが常連になっていた。詩人の岡本潤や伊藤新吉と会ったのも「カヌー」だった。岡本は常連のなかの常連であった。

埴谷雄高は「カヌー」が店仕舞いした後も「カヌー」のママと、かつて「カヌー」で働いていた「ごっちゃん」こと後藤義夫の「ユニコン」さらに「ら

いぶら」にも連れ立ってあらわれた。壇谷雄高はいつもぼくを見ると「こっちに来ませんか」と誘うのであった。ぼくはいつも数人の編集者といっしょだったが、「そちらの人たちも一緒につれて」と誘われた。

「風紋」は大杉栄や辻潤の肖像も描いている画家・林俊衛の長女・林聖子がママである。聖子ママは太宰治の「メリイクリスマス」のなかのモデルである。太宰は美形の聖子の母親の知人であり、太宰治が玉川上水に入水するとき脱いでいた下駄を発見したのも林聖子であった。無頼派は無頼漢ではない。壇一雄に会ったのも森敦に会ったのもこの「風紋」であった。壇一雄は新宿の他の店で出会うことがあったが、先に気がつかれると声をかけられ挨拶をおくられた。ぼくが会った壇一雄は温厚な紳士であった。新宿の「バー」で歓談した人たちは編集者、翻訳家、作家、詩人、歌人、舞踏家、歌手、映画監督、俳優、画家、写真家、音楽家、建築家、ふつうのサラリーマン等であった。すべて思い出されることは、昨日の出来事のような気がすることはばかりである。

(筑波大学名誉教授・淑徳大学大学院客員教授)

## 東京駅慕情

野田茂徳

東京駅丸の内駅舎は現在大きな工事用フェンスでとりかこまれている。フェンスには、大正三年（一九一四年）十二月二十日開業された当時の東京駅の拡大写真が全面に貼られていて、工事中のとげとげしさがやわらいでいる。その光景はまるで巨人の手で駅舎がやさしく抱かれているようだ。創建当時の東京駅舎は三階建てで南北にドーム状の屋根あった。外壁は赤レンガで飾られていた。ところが昭和二十年五月二十四日、山の手がターゲットになったアメリカ空軍B29機による爆撃で、駅舎のドーム状の屋根と三階そして二階と焼け落ちていった。

その日の東京駅の焼けている途中の様子を遠くから眺め、また電車に乗ろうとして駅舎に入るが電車は運行できる状態でないことがわかり、混乱状態の改札・出口の様子と崩壊の途中をたしかめて『東京焼盡』に記しているのが、内田百閒である。「夕方近く東京駅へ出て見ると、焼けて屋根もなくなり／焼けた後の東京駅の惨状は筆舌に尽くす所にあらず。廃墟は静まり落ちついているはずだが、東京駅は未だ廃墟でもない。亡びつつある途中である。」と。

戦後、二階建ての駅舎として修復したものが現在の丸の内駅舎であった。それを辰野金吾と葛西万司が設計したように復元する工事が進んでいる。

(筑波大学名誉教授・淑徳大学大学院客員教授)



## 山岡鉄舟について

八木忠太郎

山岡鉄舟との関わりを持って20年以上になる。

私の仕事は埼玉県小川町というところで、割烹旅館二葉を営んでいる。名物は忠七めし（ちゅうしちめし）というご飯で、鉄舟が命名してくれたものだ。小川町は鉄舟の父の知行地があったことから、度々当館にも訪れていたようである。必然的に鉄舟について勉強せざるをえなくなったが、なにもわからず、手探りをしながらであった。

まもなく東京学芸大学名誉教授吉田繁先生との巡り会いから、鉄舟は剣の達人で、そのために禪を徹底的にやったこと、それと同時に鉄舟独特の書ができあがったことなどを教えていただいた。

特筆すべきは、江戸城無血開城である。勝海舟の偉業になっているが、実は鉄舟が徳川慶喜の命を受け、薩摩藩士益満休之助と共に西郷隆盛がいる静岡へ命がけて直接談判に行き、江戸は戦火から免れる。正に鉄舟の偉業なのです。

西郷は、海舟に鉄舟を評して「さすが徳川公だけあって、偉い宝をお持ちだ。言葉では尽くせぬが、何分にも腑の抜けた人でござる。命もいらぬ、名もいらぬ、金もいらぬ、といったような始末に困る人ですが、但しあんな始末に困る人ならでは、お互いに腹を開いて、共に天下の大事を誓い合うわけには参りません。本当に忠胆なる人とは、山岡さんの如き人でしょう。」と言いました。

学び初めてから、私の中の鉄舟は幾ばくか進化したように思う。

（料亭二葉 十四代・淑徳大学公開講座「山岡鉄舟」講師）

## 歳時記と人々の記憶

吉田章宏

歳時記は記憶を保存する。(A)「三月十日」という日付を見て、何を思うだろうか。(B)「十二月八日」は？(C)「八月十五日」は？と、ここまで来て、「ハ、ハーン」と思う日本人は少なくなった。そう、(B)(1941年)は、「真珠湾奇襲」の日、当時の言葉で「大詔奉戴日」。(C)(1945年)は、「終戦記念日」。毎年、これらの日を深い思いで迎える人々は、既に「後期高齢者」か。(A)(1945年)は、一夜で10万人が死んだと言われる東京大空襲の日。降り注ぐ無数の焼夷弾で炎上する東京下町の巨大な炎が、夜空の厚い雲を赤く染めたあの光景を、生々しく思い出すのは、当時東京近辺在住の方々に相違ない。あの東京空襲を計画した元米国国務長官マクナマラは、60年余を経て、映画「フォグ・オブ・ウォー」で、申し訳なかつたと男泣きして詫びた。戦争は精神的外傷を遺す。

敗戦を境に、日本は軍国日本から平和日本に変貌する。当時、今日の日本社会を誰が想像できたろう。ただ願う。あの戦争の内外の犠牲者に対して恥じることをない生き方をしたい、と。

人々はそれぞれに、日々、記憶に深く刻まれた日を迎えているに違いない、と改めて思う。

（東京大学名誉教授・淑徳大学総合福祉学部教授）



## 谷中春秋

渡部治

谷中は俗に「谷根千」といわれて、根津、千駄木と一体の観を呈しているが、決してしゃれた町並みではない。ここには原宿の若やぎも新宿の喧騒もない。銀座あたりの少し気取った雰囲気もない。古い家や店が楚々として軒を連ね、通りに面した佃煮屋、小さな蕎麦屋やあんみつの店、そして一時代前の雰囲気を出す喫茶店などが立ち並ぶ街である。家の菩提寺である全生庵がこの谷中にある。五月に亡くなった母もここに入った。

谷中界限は坂も多い。私は元来、坂が好きなのだが、好きということの理由は自分でもよくわからない。しかし、坂の上から鳥瞰する家々の風景が私には親しい。あの家この家で様々な人生を人々は刻んでいるのだろう。そういう人間の生活の臭いが映画の画面から立ち上るように私をとらえるとき、私はそこに人生の滋味を感じるのである。

母も逝って、とうとうこの世に、父母というものがない身となった。親の亡くなるのは避けられない世の習いであるにしても、やはり時折寂しい気持ち湧き上がってくるのである。死の直後に握ってあげた母の手の暖かさの余韻は私には依然として昨日のことのようだ。

これからの四季折々に、私は、そういう母の感触を求めて谷中の坂を上りたいのである。

(淑徳大学国際コミュニケーション学部教授)

## 季節を彩るスカーフ

和知ヤス子

「スカーフ講師の和知ヤス子と申します」と自己紹介をすると、「スカーフを作っているのですか」、または「スカーフの販売をされているのですか」と質問をされることがあります。

「いえ、スカーフの結び方や折り方などのレッスンをしています」とお応ずると、「何故習うの？首に巻くだけでしょ」と言われる事があります。実際にスカーフ講座を受講された方々には、スカーフはただ巻くだけの物ではないことが解り、スカーフの魅力を再発見されています。受講生の多くが、1枚のスカーフで沢山のスカーフアレンジメントができることに驚かれ、イメージの違いを体感し、トータルコーディネートが上手になり……等々、「本当にスカーフは素晴らしい」とつい口をついで出してしまうほどです。また授業中は、先生素敵！綺麗！と言われて更に楽しくレッスンをさせていただいております。でも本当の意味は、先生のスカーフアレンジメントが素敵、綺麗なのですが、素直に喜んで皆さんと楽しい講座をしています。

「スカーフ講座」とは、つまり健康で楽しい講座ということですね。

「楽しいスカーフ講座」を是非ご一緒しましょう。

(ワイ・ダブリュ代表取締役社長・淑徳大学公開講座「スカーフ」講師)

## あとがき

淑徳アカデミアの第3号の発刊に寄せて

このたび、淑徳アカデミアの第3号を発刊いたしました。この創作集は、淑徳大学公開講座を受講するみなさんの日頃の創作を発表する場をつくることです。これにより、講座に参加する受講生のみなさんの今後の創作の研鑽に資したいと思います。

今年には各講座の受講生の作品だけでなく、豊島新聞の「東京歳時記―リレーエッセイ」(平成二十年四月一日から平成二十二年三月三十一日の期間)にこれまでに掲載されたほとんどの原稿を掲載させていただきました。次回には、みなさんからの意見もとりいれて、よりおおくの有識者の原稿なども掲載し、さらなる展開となるようにつとめたいと思います。

最後に、各講座をご指導していただいた講師の先生方および豊島新聞にご執筆いただきました先生方に、この場をお借りして、こころよりお礼申し上げます。

平成二十二年六月一日発行

淑徳アカデミア第3号

著者 講座講師および受講生

発行 淑徳大学エクステンションセンター

発行所 淑徳大学サテライトキャンパス

〒171-0022

東京都豊島区南池袋1-26-9 MYT第2ビル7F

TEL 03-5979-7061

FAX 03-3988-7470

印刷・製本 みつわ印刷株式会社

# 淑徳大学公開講座



淑徳大学エクステンションセンター

